

泉の水の精

ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス 著

鈴木 満訳



rei Meilen hinter Dünkelspühl in Schwabenland, lag vor Zeiten ein altes Raubschloß, das einem mannfesten Ritter zugehörte, Wackermann Uhlfinger genannt, die Blume der faust- und klobengerechten Ritterschaft, das Schrecken

昔むかしのことである。シュヴァーベンの国はデュンケルスピユール⁽¹⁾の町の背後三マイルのところに、古びた強盗貴族の城があった。城主はヴァツカーマン・ウールフィンガーという勇猛果敢な騎士で、腕力こそ正義とする武士氣質の精華にして、彼から通行証を貰わなかつたシュヴァーベンの同盟都市や旅人、運送業者らの脅威だつた。ヴァツカーマンがひとたび甲冑に身を固め、腰に剣を下げ、踵に黄金の拍車をりんりんと鳴らしていでたつと、当時のならわしに従い、切り取り強盗は貴族の特権と心得て、おのれより弱い者たちに戦いを挑む粗暴非情な男と

化すのだった。それというのも彼自身は雄々しく強杜で、強者の権利以外の捷を露知らなかつたからである。ウール・フィンガードがやつて来る、ヴァッカーマンの襲来だ、と噂が飛ぶと、全シユヴァーベンが恐れ戦き、住民は堅固な都市に逃げこみ、望楼の鋸胸壁^{ツバメノ}に立つ監視兵は角笛を吹き鳴らし、すは一大事と告げ知らせるのだった。ごく些細な侮辱にも彼は手ひどい報復をした。仲間のだれかれを、博愛主義者の腕折りR——chがかの博愛主義者の大親王バーゼドウにやらかしたのと同様な目に遭わせたもの。もつとも、腕力横行の当時にあつては、そうした野蛮なヒロイズムを發揮しても、ずっとお品のよい今日このごろ、ああいつた男でござる的行動が引き起こしたほどの悪評が、全土にひろまつたわけではない。

しかし恐怖の的この御仁、武装を解いて家庭の人となると仔羊のように柔軟、客のもてなしはアラビア人のように手厚く、心優しい父親にして情細やかな夫であった。その妻は貞淑、温順な優しい女性で、こういうのは現今ではざらに見られぬ。夫を愛すること誠実無比、家政は丹精こめてつかさどる。旦那さまが腕をふるいに騎馬で乗り出した留守ともなると、格子越しにでも浮かれ男に目をやることはない。絹のような極上の亜麻を巻きつけた糸巻等をかたわらに、せつせと糸車を回し、リュディアのアラクネ⁽⁴⁾もおのが仕上げとみまがうばかりの糸を紡ぎだすのだった。彼女は一人の娘の母で、この子たちを細心の注意をはらつて、慎ましく、かつ家事に堪能なように育てていた。この修道院のような閑寂な暮らしで、彼女の満ち足りた思いを乱すものといつては、不義の財で富み栄えている背の君の略奪^{さんまつ}三昧。彼女は心中、こうした強盗行為をする特權があるなんて、どうしても納得がいかない。そこで夫が自分に、金糸銀糸を織りこんだ豪奢このうえもない布地を、晴れ着に仕立てたら、と贈つてくれても一向に楽しまぬ。「溜め息と涙のしみこんでいるこんな屑が何になりましよう」と独りごつのがたびたび。こうした贈り物をひそやかな嫌悪をこめて衣装櫃^{びつ}に投げ入れると、以後は一顧もしようとせず、ヴァッカーマンに囚われた不幸な者たちに憐れみをか

け、懇願をして自由の身にしてやり、路銀を恵む」ともしばしばだつた。

城山の麓の茂みの奥にひつそりと隠れて、滾滾^{（こんこん）}と水の流れ出る岩清水があつた。その源は天然の洞窟で、昔からの伝承によればニクセ^{（ニクセ）}と呼ばれるある泉の水の精の住まいだとのこと。ニクセはなにか特別な出来事が起ること城に姿をあらわすことがよくある、と言われていた。奥方は、夫君が不在の折り、陰鬱な城壁の外で爽やかな大気を吸いたくなると、あるいはまた、人知れず慈善の仕事を静かにおこないたると、この泉に独りきりでよく散策に来たものである。彼女は、門衛が中へ入れようとして指図し、一定の日に食膳の余り物を分け与えるばかりでなく、臆す気持ちを厳しく抑え聖エリーザベト^{（エリザベト）}の泉のほとりでその高貴な手づから、しばしば物乞いの下着を洗つた方伯夫人エリーザベトのように、謙譲な善行に励むことも少なくなかつた。

あるときヴァッカーマンは郎党どもを従え、アウクスブルクの市からもどる商人たちを待ち伏せしようと、追剝^{（おとくさ）}にでかけたが、言い置いたより時が経つても帰らなかつた。心優しい妻はこれが気にかかるてならず、旦那さまになにか災厄が起こつたのでは、打ち殺されでもしたが、敵の手に陥ちでもしたが、とあれこれ思いわずらい、心配でたまらないため居ても立つてもいられない。何日も不安と希望の狭間で身を細らせたあげく、望楼で見張りをしている侏儒^{（じゆ）}にいくたびも声を掛ける。

「ちびのヘンゼル、おもてをごらん。森のなかにざわめく音がしないかえ。谷に蹄^{（ひづめ）}の響きは聞こえないかえ。土煙^{（じゆ）}がどこぞにあがつておらぬかえ。ヴァッカーマンが駒の足をこちらへ向けていないかえ」。

けれどもちびのヘンゼルは遺る瀬なげに答えるだけ。

「森のなかには何も動きはありませぬ。谷に騎馬はおりませぬ。風にそよぐ羽飾りも見えませぬ」

宵の明星が高みに渡つて行き、輝く満月が東の山の端に顔を覗かせる夜更けまでこうして過ごし、とうとう自室に籠もつてゐるのに耐えきれなくなつた彼女は、雨よけショールをひつかけると、小さいくぐり戸からこつそり山毛櫟の林に忍び出、お気に入りの水晶の泉へとこころざした。なお一層他人に妨げられずに苦悩に満ちた物思いに耽るために。彼女の目は涙で溢れ、なよやかな唇は嬌嬌と愁嘆に喘ぎ、泉から千草を分けて流れだすせせらぎの響きと混じりあつた。

洞窟に近づいていくと、なにやら軽やかな影が入口にふわふわしているような気がした。しかし心中ただならなかつたので、彼女はそのことにろくろく注意をはらわず、ちらと一目見た時には、折りしも射している月の光のせいで、ありもしない幻影が形作られたのだ、と考えた。けれども、もつとそばに寄ると、その白い姿は身動きして、片手で彼女を差し招いているかのよう。そこでぞうつとしはしたが、彼女は引き下がらず、それが何なのかしかと見届けようと立ち止まる。界隈に流布しているニクセの泉の噂を彼女は知らぬわけではない。その白衣をまとつた婦人こそ例の水の精だと気づいた彼女には、この出現は一族に大事が起つたことを示しているようと思われた。今差し迫つて考えつくことといつたら夫の身の上に他ならない。奥方は黒い巻き毛をかきむしり、甲高く悲痛な声をあげた。

「ああ、不幸な日だこと。ヴァツカーマン、ヴァツカーマン。あなた、最期を遂げたのね。死んで冷たくなつてしまつたのね。私をやもめに、子どもたちをみなしにしておしまいなのね」。

こうかきくどき、両の手をもみしほつていた彼女の耳に、そのとき洞窟のなかからこついう穏やかな声が聞こえた。「マティルデ、怖がらないで。私はそなたに不幸を告げはしません。安心してこちらへおいで。私はそなたの友。そなたとは非にとくと語らいどうて」。

奥方は相手のなりかたち、語ることばに恐ろしげなところは露感じなかつたので、勇気を出してこの招きに応じた。

彼女が洞窟に入ると、女あるじ主は愛想良あいじょうく手を差し出し、額にくちづけし、気のおけぬ風情で傍らに腰を下ろすと、こう口を切つた。

「私の住まいにようことまいられた、命に限りあるそなた、人の子よ。そなたの心はわたしの泉のように清らかで純粹。それゆえ目に見えぬ力ある精たちはそなたが大好きなのです。私はそなたにそなたの生涯の運命を打ち明けてしんぜましよう。それがそなたに私があげられるただ一つの好意の徵しおなのです。そなたの夫は生きています。そして雄鶲おゆづけが曉を高らかに告げる前に、ふたたびそなたに抱かれていることでしょう。喪に服さなければならぬ、などと心配することはないのでよ。そなたの命の泉はあの男のそれより早くに涸れるでしょう。でもその前にもう一人娘御を授かりますよ。この児の誕生の刻限はゆゆしいもの。搖れる宿命の天秤のうえで幸運と災厄、二つながら受け取ります。星回りは悪くはないのですが、害意を抱く対日たのひつじゆ照がありましてね、これが母親の庇護ひごという恵みをこのみなしごから奪つてしまふのです」。



奥方は、いとけない娘が真心籠もつた母親の世話を受けられない、と聞いて悲嘆にくれ、わっと泣きだした。水の精はこの様子にいたく心動かされた。

「泣かないで」と妖精は言つた。「私は、そなたがお児の助けができなくなつたら、母親代わりになつてあげるつもり。ただし、^{嬰兒}の姫の洗礼の代母に選んでくれるのが条件です。そうすれば私はその児と関わりができますからね。それから、そなたが私に世話をゆだねるその児が、私が洗礼の贈り物にした品を私のところにまた持つてくるのを、忘れてはなりません」。

マティルデ夫人がこの要請を承知すると、ニクセはすべすべした小川の小石を一つ手に取り、忠実な侍女に言いつけて、しかるべき時期に、洗礼式への招待のしるしとして、泉に投げこませるように、と付け加えながらそれを彼女に渡した。マティルデ夫人は、すべて真心こめてその通りにします、と約束、言われたことを逐一胸に刻みこむと、城にたちもどつた。水の精はというとふたたび泉に入り、姿を消す。

その後まもなく侏儒が欣然として塔の高みから喇叭を吹き鳴らした。ヴァツカーマンは家来たちとともに獲物を満載し、勇んで中庭に馬を乗り入れた。一年経つと貞潔な奥方はおなかに子宝が宿つたのに気づき、旦那さまにこれを告げると、こちらはこの知らせに大喜び。なにしろ男の跡継ぎが欲しかったのでね。奥方はというと、洗礼式の件をどう処置したものかと心配でならない。水の精の泉での顛末を打ち明けるのはためらわれたものだから。折しも、ヴァツカーマンが酒の席で侮辱したので、命を賭けて決着をつけようとするある騎士から、果たし状を叩きつけられるという事態が起つた。彼は自身と兵士たちをつかと武装、鞍にうちまだがろうとして、ならわし通り奥方と別れを告げたとき、彼女は慎重に夫が何をしようとしに行くのか探り、これまでそんなためしはなかつたのに、だれと闘いに行くのか言つてください、とせがんだ。彼が妻の常ならぬ詮索を愛情こめて非難すると、彼女は顔をおおつてい

たましく泣きむせんだ。これには騎士殿の胸が痛んだが、それでも事情は打ち明けず、馬上の人となり、闘技場へと急ぎ、敵と烈しく対戦、果敢に駒を進めて相手を倒すと、凱歌がいかをあげて家路についた。
 しとやかな内室は夫を双の腕を開いて迎え、にこやかにいたわり、優しいことばの数々と女人の甘いおもねりの手管を費やして、どんな冒険をやりとげましたの、と彼から聞き出すのを止めなかつた。しかしこちらは素早く心を閉ざし、すべての入口に情の剛さごわという錠を下ろし、何一つ打ち明けるどころか、知りたがりをからかって、こんな人を喰つたことを言う。

「おお、母なるエーファよ。あなたの娘たちの性質はいまだに変わっちゃおりませんなあ。好奇心、詮索好きといふのが今日に至るまで女たちの相続財産ときたもんだ。女だつたらだれだつて禁断の樹の実を摘みたくてたまらないだらうて。あるいは、絶対開けるなど言われた見せかけ料理の鍋の蓋(19)を上げて、中に隠れていた小鼠を飛び出させにはいられんとかな」。

「失礼ですけど、旦那さま」と利口な妻は答える。「男の人たちだつて母なるエーファの遺産のうちからそれ相当の分け前をもらっていますわ。違ひといえば、善良な妻は夫には何か秘密にしてはいけない、ということだけ。もし私の胸に何かあなたに隠したいことがあるとしたら、賭けてもけつこうですけど、あなた、その私の内緒事を聞き出すまで、居ても立つてもいられないでしょうよ」。

「それじやわしはな」とちらは受けて「おまえに誓うよ。おまえの秘め事など何も気にしやせんとな。試してもよいぞ」。

背の君はこれでマテイルデ夫人の思つ壺に嵌はまつたわけ。

「よろしくうございます」と夫人。「旦那さま、ご存じのように、私が身二つになりますのももうじき。すこやかな

児を産みましたら、赤ちゃんの洗礼に立ち会つてくださる代母を選ぶことを私にお許しくださいまし。あるお友だちですが、私この方をとおから考えておりますの。それでお願いですけれど、その方のお名前、ご素性、それからお住まいを言え、と無理強いなさらないで。このことをあなたが騎士の名誉にかけて約束なさり、しかと請け合つてくださるなら、私、賭けには負けました、と申しますし、殿方の知恵分別はめめしい好奇心など押さえつけてしまう、と率直に認めますわ』。

ヴァツカーマンは否応なく妻にそのことを誓つたので、こちらは自分の抜け目ない計略が上首尾に終わつたことを心から喜んだ。

ほんの数日後奥方は姫君を産んだ。父親としては息子を抱きたかったのだが、嬉しくないことはない。隣人、友人のもとへ馬を馳せ、洗礼式へと招待した。彼らはうちそろつて指定の日にやつてきた。産婦は、馬車のきしる音、駒の嘶き、召使たちの大騒ぎを聴きつけると、腹心の侍女を呼び寄せて、こう言った。

「この小川の小石をね、なにもしゃべらずに後ろ向きに水の精の泉に投げこんでおいで。急いで言われたようにおし」。

侍女は女主人の指図に従つた。すると彼女がまだもどらぬうちに、ひとりの見知らぬ貴婦人がサロンに入つて来て、居並ぶ客たちに慎ましやかに挨拶した。赤子が連れて来られ、授洗の司祭が洗礼盤に歩み寄ると、彼女は代父母たちに分け入り、その先頭に立つた。だれもがよそからの貴賓である彼女に恭しく順を譲つたので、洗礼の際子どもを一番に腕に抱いたのは彼女だった。一同の目はこの婦人に集中した。彼女はこよなく美しく、このうえなくしとやかで、そのうえ水色の絹でできた軽やかな衣装に白縫子の裏打ちをした裂け目袖という見事な装い、さらに、教会の大祭日のロレットの聖処女のように、宝石と真珠の装身具で豪奢に身を飾っていた。一顆のきらめくサファイアが留

めているのは透けて見えるヴェールで、これはさながら薄雲のように、精巧に編まれた髪のてっぺんから両肩をおおつて、足の踵までふんわりとたなびいていた。もつともヴェールの裾は水に浸ったかのようにしつとりと濡れていた。⁽¹²⁾ 思いもかけず見知らぬ貴婦人が現れたので、代父母一同は心を乱され、子どもに名をつけることをうつかり忘れていた。そこで司祭は母御の名にちなんで洗礼を施した。洗礼の儀式がすべて滞りなく終ると、小さいマティルデは母親のマティルデのもとに連れもどされ、代父母たちは皆、産婦を祝福し、名付け子に洗礼の贈り物をしようと、後について行つた。産婦は他の者たちのついぞ知らぬ女性を目にするとき、なにがなしほつとした気配だつた。おそらくはニクセがこうも誠実に約束を守つたのに驚嘆したからだろう。奥方がちらと夫に目をやると、こちらはいわく言いがたい微笑みを返したが、それ以上この見知らぬ上臍にことさら注目する様子は見せぬ。代父母たちの贈り物を受けるのが当の母君としてはまた一仕事。黄金の雨が洗礼を受けた赤子に氣前良く滔滔と降り注いだ。あの見知らぬ女性が代母の贈り物を手にして進み出たのは最後だつたが、立会いの他の代父母たちは期待をすつかり裏切られた。一同がさもあらんと思つていたのは宝飾品、さもなければ莫大な値打ちのメダルかなんぞだつた。女性が絹のハンカチを取り出してゆつくりゆつくり開いた時にはなおさらのこと。けれどもこの代母の婦人が包みからそれへ出したのは木製の林檎の形をした香盒⁽¹⁾で、これを彼女は厳かに子どもの振り籠のうえに置き、母親にこやかにくちづけすると、部屋から去つて行つたのである。このけちくさい贈り物を見て、居合わせた人々のあいだにひそひそと囁きが流れたらかと思うと、どつと嘲りの哄笑⁽²⁾が起つた。産室によくあることで、あれやこれや意地悪な言及やら見解やらが取り沙汰されずにはいられなかつたが、騎士も奥方も深い沈黙を守つたので、誇索好きな男どももくちさがない女たちはあだな推測をして楽しむのがせいぜい。見知らぬ上臍は一度と姿を見ることなく、彼女がどこへ去つたのか言える者はなかつた。もとよりヴァッカーマンは、なにしろだれもその名を知らぬこととて、濡れたヴェールの貴婦人と

呼ばれるようになったあのよその女性は何者なのか究明したくてたまらず、内心すこぶる辛かつたが、ますらおぶりの騎士としてめめしい行為に走るのはためらわれたし、口に出した誓いは破れなかつたから、仲睦まじい語らいのひととき、「なあ、あの濡れたヴェールの代母はどこのだれだつたのだ」との質問が唇までこみあげても、ぐつとこられたわけである。彼はいすれ妻からこの秘密を策略か愛情かを用いて釣り出そうと考えたし、篩ふるいが水を溜めておけないと同様、無言の行がお得意というわけではない女心の特性を当てにしていた。けれども今回は思惑外れ、マティルデ夫人はしつかり口を閉ざし、解けない謎を、あの香盒を貴重品入れにしまいこんだと同様、そつと胸に秘し隠したのである。

小さい姫君があんよはお上手を習う紐(13)を卒業しないうちに、その母に対する水の精の予言が実現した。突然病におかれると、林檎の香盒のことを思い起こしたり、小さいマティルデのために水の精の言いつけ通りにそれを処置したりするいとまもなく、死んでしまう。折しも夫はアウクスブルクへ馬上試合にてかけて留守にしており、皇帝フリードリヒ(14)から優勝の冠を受けられて帰途についたもの。塔のうえから騎士が近づくのを彼方に見つけた侏儒は、城の者たちに主の帰着を告げ知らせるため、ならわし通り角笛を吹き鳴らした。けれどもこのたびは常のよう悦びの調べではなく、かなでたのは哀愁を籠めた旋律。騎士は心臓がきゅつと痛み、気が氣でならぬ。

「わしの耳に鳴り渡るのはなんという響きだ」と彼は言う。「者ども、あれが聞こえるか、あれは鶴からすの叫び、弔いの唄ではないか。ちびのヘンゼルはわれらに凶事まがことを知らせているのだ」。

従士たちは皆はつとし、うちひしがれて主君を見つめ、中の一人がこう口を切つた。「あれはまつしろ白鳥しらとり(15)の歌声、神さま、災厄はらを祓ほいたまえ、城でだれぞお亡くなりになつたのだ」。

ヴァツカーマンは乗つた雄馬に拍車をかけると、火花を散らさんばかりに開けた地面を駆けぬけた。跳ね橋が下り

ると、彼はしげしげと城の中庭を覗き、無念にも自館の扉に喪中のしるし、ひるがえる一筋の黒の紗で飾られた無灯のカンテラが掲げられており、窓の鎧戸がすべて閉ざされているのを目にしたのである。そればかりか中から召使たちの啜り泣きと愁嘆の声が聞こえた。マティルデ夫人の棺が棺台のうえに載せられるところだったので。棺の枕辺には二人の姉娘が喪服に身を包んで座り、みまかた母御前を悼んでさんざんと涙を流している。棺の脚元ではちいちやい愛娘が座りこんでいたが、喪失したものの大きさを感じることができず、子どもらしく落ち着きはらつて、遺体を飾るのに用いた花の残りをむしっていた。このもの悲しい光景にヴァッカーマンの毅然とした雄々しさも敵しかね、大きな声で泣きわめき、氷のように冷えた亡骸に身を投げかけ、その蒼白な頬を涙でしどろに濡らし、わななく口を動かぬ唇に押しつけ、憚ることなく苦しい思いのだけを吐露したのだつた。それから武装を解いて兵器庫に掛けると、縁のしおれた帽子と黒の喪の外套で身を覆つて棺の傍らに座り、他界した妻を嘆き悲しみ、厳かな葬儀をおこなつて最後の敬意を示した。

しかしながら、さるりつぱな男の所見に従えば、最も激烈な苦悩は最も短いのが常。そういうしだいで、がつくりと挫けていたこのやもめ男はすぐに胸の痛みを忘れ去り、蒙つた損失を後添いをもらつて埋め合わせようと本気で考えた。選んだのは口も八丁手も八丁の奔放な女性で、温良でしとやかだったマティルデとは正反対。だもので家のとりしきりかたはまったく面目を異にする。若妻は奢侈逸楽が大の好物。召使たちには威張りくさつて居丈高にふるまう。うまい物を食べたり飲んだり、宴会騒ぎは果てしもないありさま。この女、多産なものだから、間もなく館には子どもがうじやうじやはびこりだす。先妻の娘たちはもはや顧みられることなく、まったく忘れ去られた。上の姫たちが成長すると、繼母は綺麗さっぱり厄介払いしてしまおうと企み、おかげで彼女らはデュンケルスピユールの尼僧院に賄いつきで寄宿させられてしまう。小さいマティルデはとくに、お付きは一人のばあやだけで、ほつん

と離れた小部屋に移され、家族の世話を焼くなんてまっぴらごめん、という浮かれ女にしてみれば、まずまず没交渉の身とあいなつた。女の贅沢三昧は度を増して、騎士がどんなに稼業に精を出しても、かの強者の権利の収益はもうそれと太刀打ちができぬ。彼女はしばしばしようとことなしに、先妻の遺産を掠め取つたり、りっぱな服地を二束三文で売り飛ばしたり、それを担保にユダヤ人から金を借りたりする羽目になつた。ある時とりわけ経済的苦境に陥つた女は、金目の物をみつけようと引出しや櫃を捜し回つたところ、化粧簞笥の秘密の仕切りを発見、そこにマティルデ夫人の貴重品入れを見つけて大喜びしたもの。ダイヤモンドの指環、耳飾り、腕輪、ドレスの留め針、その他装身具類のきらめく宝玉に彼女の貪欲な目は恍惚とさせられた。すべての品を丹念に検分、一品ひとしな吟味して、この素晴らしい拾い物でどれだけ儲けが転がりこむか、あれやこれやと胸算用。こうした貴重品のなかに例の木製の林檎の香盒を目撃した女は、どうしたものかと長いこと考えた。捻じ開けようとみてみたが、湿気で膨張してしまつて、手にして重みを量ると実無し胡桃ほどの軽さ。これは空っぽの指環入れかなんかだわ、と考えた彼女はどうにもしようがなかつたので、値打ちなんかまるきりありやしない、と窓から外へ投げ捨てた。

たまたま城の外壁と内壁のあいだの内庭に座つて、お人形遊びをしていた小さいマテイルデは砂のうえに木の球が転がっているのを見て、お人形を放り出すと、子どもらしくわくわくしてその新しい玩具を拾い上げ、この賜物をママがもらつたときとまったく同様嬉しがつた。何日も何日もこれで遊んで手から放さない。とある日曜日のこと、ばあやはお守りしている姫君を連れてあの岩清水のほとりで気持ち良く涼もうと思ひ立つた。おやつの時間になつたので、子どもは、いつもの蜂蜜入りの巻きパンをちようだい、とねだつたが、こちらは持つてくるのをついうつかりしたのだった。まだ帰りたくなかったたばあやは子どもをなだめよう、木苺をひとつかみ摘みに茂みのなかに入つて行つた。そのあいだ子どもは香盒をもてあそび、毬みたいにあちこち投げていたが、とうとう一度しくじつて、この本

来の意味であどけない楽しみの種が泉のなかに落ちこんだ。その途端、天使のように美しく、典雅の女神の一柱のようになにこやかな若い貴婦人がそこに立つた。子どもははつと度を失つた。目に留まるといつもこの子を叱つたりぶつたりする継母が現れたのかと思つたからである。けれども水の精は穏やかなことばでこう優しく語りかけた。

「怖がらないのよ、ちいぢやい嬢ちゃん。私はそなたの代母なのよ。こちらへいらっしゃい。ほら、泉に落ちたそなたの玩具はここよ」。

こうして子どもを誘い寄せると、彼女は膝に載せ、いとおしげに胸にぎゅっと押しつけ、小さいマテイルデを抱きしめたり、くちづけしたりし、涙でその顔を濡らした。

「かわいそうなみなしこさん」と彼女は言つた。「私は以前そなたのお母さまの代わりをすると約束しましたし、それを守るつもりです。私をしげしげ訪ねてくださいね。石を泉に落とせば、いつもこの洞窟で私に逢えます。この香盒を大事に持つていなさい。無くしたりしないようにもうこれで遊んではいけません。それはそなたに三つの願い事を叶えてくれるでしょう。そなたが大きくなつたら、もつといろいろ教えてあげますけれど、今はまだそなたにはよく分かりません」。

水の精はマテイルデにさらに子どもの年齢相応の忠告をいくつもし、だれにも黙つていてるようだ、と言いつけた。ばあやがもどつて来ないうちに水の精は姿を消した。

諺にいわく、今日びは子どもなんていやせぬが、昔は違つたものだつた、と。しかしながら小さいマテイルデは子どもは子どもでも、さかしく聰明だつたので、ばあやには代母さまのことは思慮深く何一つ触れず、城にもどると、縫い針と糸をちょうだい、と言つて、香盒を服の裏地のなかに念入りに縫いつけた。考えることといつたら水の精の泉のことばかり。天気さえ許せばお守りの女に向かつて、あそこへお散歩に行きましょう、と持ち出すし、こちらは

この愛嬌たっぷりの女の子に逆らうことなんぞできはしない。それになにせ洞窟が母御前のお気に入りの場所だったせいで、それを好むのはうまれつきだと思われもしたので、ばあやはひとしお気軽にちびちゃんのこの頼みを聞き入れたしだい。さて姫君はばあやをわきに行かせる口実をしようちゅう思いつき、老女が背を向けたとたん、水中に石がぱちやん。そして賢い女の子はうまうまと魅惑的な代母とふたりきりになる。数年経つうち幼いみなしごは花恥ずかしい芳紀に近づき、その麗しさは、色とりどりのハマカンザシの群れのなかに移植された百葉の薔薇の薔のように、慎ましやかな品位のうちにこっそりと秘め隠されていた。なるほど花開き始めたのは城の内壁と外壁の狭間の内庭のなかだけ、召使のあいだにひそんでの暮らしである。贅沢な繼母が饗宴を開いても、彼女が出席することはなく、自室に籠もって家事に専念、そして一日の仕事を終えると、夕暮れには泉のそばで水の精と語らいあつて、無しで済ませているさんざめきの楽しみの埋め合わせをたっぷりしてもらうのだった。水の精は彼女の話し相手でお友だちというばかりでなく、家庭教師でもあり、女性の嗜みたしなみ一通りにわたつて姫君を教育、その淑徳高かつた母親を模範として薰陶した。

ある日のこと、水の精は魅力溢れるマティルデに対していくもの愛情を倍にしたかのよう、両腕に抱き締めると、頭を相手の肩に垂れ、すこぶるうれわしく悲しげな風情を見せたので、姫君は同じ気持ちになつて、唇におしあてた代母の手に幾粒かの涙を落とさずにはいられなかつた。このゆうに優しい同情に水の精はことさら憂愁に包まれた。「姫」と彼女はせつない声音で言う。「そなた、ゆえを知らないのに泣いておくれなのだね。けれど、そなたの涙はそなたの運命をあらかじめ予感したからなのです。山のうえの館には一大事が迫っています。麦の刈り手が大鎌をふるい、小麦畠のうえを風が吹きすさぶようになる前に、お城は荒涼とした廃墟になつてしまいましょう。お城の女中たちが私の泉に水を汲みにきて、空の桶のまま引き返すことがあつたら、不幸が到来すると思いなさい。三

つの願い事を叶えてくれる林檎の香盒を大切にしてね。願いを無駄に唱えではなりません。さようなら、ここで逢うことには二度とないでしよう」。

それから水の精は姫君に、困った時に役立てるように、とさらに幾つかのこの林檎の魔力を教え、いざ別れとなると啜り泣いてことばにもならず、姿を消して再び現れるることはなかった。

小麦の収穫の時期となつたある宵のこと、水汲み女たちが蒼褪め^(あおざ)、衝撃を受け、間歇熱^(かんげきねつ)の悪寒に襲われたかのよう

に全身をわななかせながら、空の壺を手に城にもどつてきた。口々に言うことには、例の白衣の女性が泉のそばで両手をもみしほり、うめき声をあげ、いかにも悲しそうな様子だった、これは何か不吉なことの前知らせだ、と。兵卒どもや盾持ちたちは、それは目の迷いで女の空騒ぎだ、とその言い草をばかにしたが、わけがあるのでやら無いのやら調べてやろう、と好奇心に駆られてでかけた幾人かも同じものを目撃した。彼らはそれでも勇気を奮い起こして泉のところまで行つた。近づくとその姿は消えてしまつていた。それから侃侃諤諤^(かんかんがくがく)の意見、解説が始まつたが、結局のところ本当の意味を推量した者は皆無。マティルデ姫だけが分かつていたが、水の精が黙つているようにと固く言いつけたので、口外はせぬ。彼女は独りふさぎこんで部屋に閉じ籠もり、これから起らるはずの事態をおののきながら待ち受けた。

ヴァツカーマン・ウールフインガーは奥方と酒に鼻面取つて引き回されていた。浪費家の細君のためにいくら強盜略奪をやつても足りなかつたし、追剥にでかけていないときには、この女房殿、ご亭主のために連日酒盛りを開き、飲み仲間を呼び集め、歡樂の陶酔でふらふらにさせたので、醒めた眼で家計の崩壊に気づくことは一度もあらばこそ。現金や食料が尽きれば、ヤーコブ・フッガー⁽¹⁾の荷馬車隊か、ヴェネチア人の輸送団がいつも新たな収益をもたらしてくれる、というわけ。こうした辛酸劳苦にはほとほとうんざりしたシュヴーベン同盟の総会は、度重なる注意警告も

何ら成果を挙げなかつたので、ウールフインガー打倒を決議、彼がこれは極めて深刻な状況だと悟る前に、都市同盟の軍旗（ママ）が彼の山城の大手の外で翩翩⁽¹⁸⁾と靡いた。こうなつては命をできるだけ高く売ろうと心を決めるよりいたしかたない。射石砲や喇叭⁽¹⁸⁾銃が稜堡⁽¹⁹⁾をゆるがせ、弩⁽¹⁹⁾は両軍で全力を尽くす。弩や大弓の矢が雨霰⁽²⁰⁾と飛ぶうち、ヴァッカーマンの守護靈がちょっと離れた不幸な瞬間に放たれたその一本が、彼の兜の面頬⁽²¹⁾を貫き、深々と脳に突き刺さつたので、かれはすぐさま冷たい死のまどろみに昏倒した。主君の戦死に兵士らは大恐慌に陥つた。何人かの臆病者が白旗を掲げるかと思えば、勇敢な連中がそれをまた塔から引き下ろす、という具合。そこで、城内の規律が失われ、混乱している、と見て取つた敵の攻囲軍は突撃にうつり、城壁を乗り越え、大手門を占領、跳ね橋を下ろし、前をさえぎるものすべてに鋭い剣をふるつた。この災厄の張本人である浪費家の女でさえ、その子どもたち全員とともに、かねて強盜貴族の所業に憤激していた怒り狂つた軍勢に、のちのシユヴァーベン農民戦争⁽¹⁹⁾の反逆者たちと同様殺された。城は綺麗さっぱり略奪され、火を放たれて灰塵に帰した。

戦験⁽²⁰⁾のあいだマティルデ姫は、自分の屋根裏部屋というパトムスに静かにひそみ、扉に錠をかけ、中からしつかりと門⁽²¹⁾を下ろしていた。けれども外がてんやわんやの騒動になり、鍵も門も身の安全を保証してくれそうもない、と気づくと、ヴェールをかぶり、林檎の香盒を三度手のなかで回し、泰然自若として部屋を出た。そのまえに唱えたのは、水の精が教えてくれた呪文。

うしろには夜、前には昼を、
だあれも私が見えないように。

こうして彼女は見咎められることなく敵の軍勢の真っ只中を通り抜け、父親の城の外に出たのである。けれども胸は悲しみにうちひしがれ、どこへ向かつたものやら見当もつかない。華奢な足がもういやと言ひださないあいだは、乱暴狼藉の現場から遠のこうと道を急いだが、とうとう宵闇も迫り、疲れきりましたので、野天の野生の梨の樹の下に一夜の宿を借りようと決めた。冷えびえとした芝草のうえにうずくまつた彼女は涙がどつと流れるにまかせた。もう一度彼女は来た方角をふりかえり、子ども時代の歳月を過ごした場所に別れを告げようとした。目を上げると、天涯に血のような赤い火が見え、先祖伝来の館が炎の劫略にゆだねられていることが分かつた。このむごい光景から目を背けた彼女は、きらめく星ぼしが光を失って、東の空から曙が輝き初めてくれれば、としみじみ願つた。日が出て、朝露が草のうえで小さい雫にまるまるないうちから、彼女はあてもない巡礼行を続ける。まもなくある村に辿りついたマテイルデは親切な百姓女にもてなされ、一切れのパンと

一杯のミルクで元気を回復。この女性から農民の衣装を交換で手に入れると、アウクスブルクへと目指す輸送馬車隊の仲間に入れてもらった。こうした情けない切羽詰まつた状況では、下働きの女中として雇つてもらうほかはない。けれども何分時期外れだったの

で、長いこと奉公先を見つけることはできなかつた。

シュヴァーベックの伯爵コンラートは十字軍のドイツ人騎士^㉑で、アウクスブルク司教区の蔵代官かつ守護職を兼ねていたが、同地に冬のあいだ住むのを常としている別邸をひとつ持つていた。留守をあずかるのはゲルトルート夫人という女中頭で、これが家事万端を



とりしきる。この女性、全市に悍婦として聞こえ高く、その下で辛抱できる召使はいないというあります。なにせボスター・ガイスト⁽²³⁾のよう家中をかしましくのし歩くのだ。彼女の腰につけた鍵がガチャガチャ鳴るのを耳にすると女中たちは、子どもがループレヒトを怖がるように震え上がる始末。どんな些細な手落ちでも、いや、ただ彼女の虫の居所が悪いというだけでも、頭に壺が飛んでくるというあります。でなければ逞しい腕に鍵束をおつとると、女中の背中といい腰といいぶちのめし、青痣⁽²⁴⁾だらけにしてしまう。そこでひどい女を形容したければ、伯爵邸のトルーデばあさんがみたいに酷い、で通る。ある日のこと彼女は職務上の処罰権をひどく無法にふるつたので、召使がすべて逃散、そこへおとなしいマティルデが現れて、使っていただきたい、と申し出た。姫君は高貴な容姿を隠すため片方の肩に詰め物をして背中の曲がった不具のふりをし、絹のような金髪をだだつびろい頭布で覆い、顔と手には煤⁽²⁵⁾を塗りつけてジプシーみたいな肌にみせかけた。彼女が玄関口の鈴を引いておとなうと、ゲルトルート夫人が頭を窓から突き出した。へんてこな姿が目に入ると、これは物乞いだと思い、窓をぴしやりと閉めた。

「ここは施物所じゃないよ。フツガーライ⁽²⁶⁾に行きな。あそこなら銭⁽²⁷⁾を惠んでくれるさ」と下へ大声でどなると、

マティルデ姫はそれにはびくともせず、長いこと鈴を鳴らし続けたので、とうとう女中頭はこの無礼千万をこっぴどく叱りつけてやろうと、また首を出した。けれどもばあさんが歯の無い口を開かぬうち、姫君は用件を相手に説明した。

「おまえ、名前は。そして何ができる」とゲルトルート夫人が訊ねると、身をやつした乙女が答えて言つには

あたしはみなし

名前はマテイルデ。

できることはアイロンかけ、はい、火熨斗かけ、

お針仕事に糸紡ぎ、⁽⁴⁾

刺繡、編み物、はい、目拾い、

お肉刻みや肉叩き、

焼いたり煮たりができます。

なんでも器用なこのあたし、

それも手早く上出来に。

この小唄を聞いて、胡桃みたいに茶色の娘がすこぶる多くの才能に恵まれていてそれを知った家政婦は、扉を開けてやり、雇い入れのしるしの手金てきんをうち、台所へ入れた。娘は仕事をとても忠実にやってのけたので、ゲルトルート夫人は壺つぼを的てきに投げつけるのをまつたく止めてしまった。がみがみぶつぶつ言うのは相変わらずで、なんにでも難癖をつけ、おまえは物知らずだねと嵩かさにかかるのはしょっちゅうだつたが、この女中は相手を敵とは思わず、優しさと忍耐で不機嫌の八つ当たりを受け流すのだった。夫人は昔にくらべると我慢強く親切な性分に変わり、温順な召使は、優秀な連隊と好天氣と同じく、温良で物分かりのよい上役を作る、という証あかしになつた。

初雪が到来すると、女中頭は采配をふるつて屋敷中をびかぴかに掃除、窓を洗い、カーテンを掛け、ご主人さまをお迎えする準備をすっかり整えた。やがて彼が華麗な供ともわりに囲まれ、夥しい馬と獵犬を連れて冬の初めに現れる。マテイルデは十字軍士のおいでをほとんど気に留めていなかつた。台所仕事がとても増えたのでお顔を見に出る暇が

なかつたのだ。出会つたのは偶然で、ある朝彼女が中庭で水を汲んでいたときのことだが、その風采に心中今までついたり知らなかつた感情が花開いたもの。伯爵はこれまで見たうちで一番端麗な青年で、輝く目、陽気な物腰、愛想のよい寛闊な印象の持ち主だつた。軽くカールした波うつ髪が、男らしく目深にかぶつた帽子の駄鳥の羽飾りの陰に半ば隠れている。このひとの毅然とした足取り、上品な容儀は乙女の心にとても強く訴えたので、これまでになく動悸が速まり、血がぐるぐるとめぐり流れた。この時初めて彼女は不幸な宿命のために落としこまれた身分と、おのが生まれつきの身分との甚だしい懸隔を身に沁みて感じた。それは重い水桶よりももつと彼女をうちひしいだ。物思いにふけりながら台所にもどつたマティルデは、仕事をしてて初めてすべての肉汁を塩辛くしすぎてしまい、家政婦にこつぴどく叱りとばされた。それからというもの日ごと夜ごと目の前に美しい騎士の面影がちらつき、姿を見たくて矢も楯もたまらなくなることがたびたび。ご主人が中庭を歩き、拍車の音が聞こえると、お台所にお水がなくなつたわ、と急いで水桶を持つて井戸に行くのだった。誇り高い貴族がちらりとでも視線を向けてくれることはなかつたけれども。

コンラート伯爵の生き甲斐はひたすら娯楽だけのようで、ヴエネチア人との交易のおかげで贅沢になつたこの豊かな都市の楽しい催しや酒宴にはかならず参加するのだった。あるいは馬を駆けさせながらの槍での輪突き遊び、あるいは闘技場での馬上槍試合、あるいは市参事会の交代式典とかいった類のきらびやかなお祭り行事の数々。市庁や市場、あるいは街頭での格式張つた輪舞にも事欠かなかつた。そうした折りには貴族たちが市民の娘を相手に、敬慕のしるとして黄金の指環や絹の布を捧げたり、恋の戯れや罪のない悪戯にふけつたりするのだった。謝肉祭(フースト)の仮装の時期になると、どんちゃん騒ぎは最高潮に達する様子。マティルデ姫はそのどれにも加わることなく、燃(くべ)つた台所に座りこんで、せつなく焦がれる両の目をほとんど泣き腫らし、お気に入りには人生の悦びを滝津瀬のように浴びせ

かけておきながら、ひいきにしない者はまるきり目を掛けない幸運の勝手氣儘^(きまね)ぶりを嘆くばかり。なぜか自分には分からぬのに、胸が締めつけられるように苦しくてならない。それは愛神^(アーモル)が棲みついたからなのだが、彼女はそれと気づかない。入りこんだどの家にも混乱をもたらすこの厄介な客は、昼間は彼女に小説にあるような考え方を千も囁き、夜はいたずらな夢で構いにくる。彼女はあるときは十字軍士と花園をそぞろ歩き、あるときは修道院の神聖な壁の中に閉じ込められ、伯爵は面会室の格子窓の向こうに立ち、彼女としつぱり話をしたいと言つて止まないので、厳格な尼僧院長はそれを許可してくれない。それでも時には楽しい舞踏会で彼と輪舞の先導をするといったこともあつた。

こうしたうつとりする夢はしばしば不意に、下働きの者たちを朝早く仕事に駆り立てる合図であるゲルトルート夫人の鍵束ががちやがちや鳴る音で破られる。けれども夜の幻想が紡ぎあげたさまざまな考えが、昼の間にある思いつきとなつて実を結んだ。

恋の前には危険もなんのその。山も岩も乗り越えるし、

断崖もひとつ飛び、リビアの砂漠も踏破するし、白い雄牛の背に乗つてペラグスの急流も泳ぎ渡る。⁽²⁶⁾恋するマティルデは長いことあれやこれやと考え抜いたあげく、見た夢の



なかで一番素晴らしいのを実現する手だてを発見した。彼女は、三つの願いを叶えてくれるという、代母の水の精がくれた林檎の香盒をまだ持っていたが、それを開けて、具えている力を調べようという気にはこれまで一度もならなかつたのが、初めて試してみることにした。アウクスブルクの住民は皇子マツクスの生誕を祝い、皇帝フリードリヒを讃えて、三日続ぎの壮大な祝宴を計画しており、かねて近隣の高位の聖職者、伯爵、貴族を大勢招待していた。その折り毎日定めの賞品をかけて槍試合がおこなわれ、宵には最も美しい乙女たちが市庁に連れて来られて高貴な騎士たちと踊り、これは白しら明けまで続くのだった。騎士コンラートはもとよりこの宴に列席するのにやぶさかでなく、毎夜舞踏の際あえかな奥方たちや乙女たちの寵児となつた。ただし、法に則つた愛を捧げられる女性は一人もなかつた。というのも彼は十字軍士だからで。⁽²⁾それでも女性たちは皆、端麗でいかにも楽しい踊り手の彼をいとしく大切に思つた。

マティルデはこれを好機にひとつ危ない橋を渡つてみようと心を決めた。台所を片づけ終わり、家中がしんと静まりかえると、自分の部屋へと上がりつゝ行つて、極上の石鹼で煤の汚れを皮膚から洗い去り、肌に百合の白と薔薇の紅を咲き匂わせた。それから林檎の香盒を手に取り、できるかぎり壯麗豪奢なドレスをそのままの付属品もろともくださいと願つた。蓋を開けると絹の布地が溢れだし、伸び広がつて水のせせらぎのようにさらさらと彼女の膝に落ちた。子細に眺めると、それはそれ相当のこまごました宝飾がことごとく揃つてゐる完全無欠な衣装で、鋳型に嵌めたようになじみ合つた。そこで姫は、若い娘が異性のために装いを凝らし、危険な網をしかける時、感じるのが常の深い胸のときめきを感じた。衣装を検分するとなにもかも女性のお洒落心をくすぐつてくれる。そこで彼女は完全に満足、躊躇せず計画を実行することにし、魔法の林檎を三度手のなかで回し、こう唱えた。

皆ぐつすり寝ていてね。

すると目敏い女中頭から門番たちにいたるまで、屋敷の召使は全員すぐさま深い眠りに見舞われた。マテイルデ姫はさつと玄関から外へ出ると、人に見咎められることなく幾筋もの街路を通り抜け、さらながら典雅の女神の一柱のようなおやかさで舞踏場に脚を踏み入れた。なみいる人々はかくも麗しい容姿の乙女に賛嘆しきり、広間のぐるりを取り巻いている高い張り出しでは、司祭が説教壇のうえでアーメンと唱えるときのように、ざわざわと囁きが走った。ある者たちはこの見知らぬ女性の美しい姿形に、またある者たちはその衣装の趣味の良さにうつとり、さらには何という名で、どこから来たのか知りたがる向きも。けれどもだれもこの問い合わせに答えられない。

この未知の乙女を是非一目と押し寄せた高貴な騎士・貴族の面々の中で、十字軍士がおくれをとるわけはない。洗練された乙女鑑定家で、女嫌いとは到底言えない彼には、これほど晴々とした容貌、これほど魅惑的な体つきはこれまで見たことがない、と思えた。近づいてダンスに誘うと、相手はおずおずと彼に手を差し延べたが、その舞踏ぶりの素晴らしいこと驚くばかり。軽やかな足はほとんど地に触れないかのよう、身のこなしは高雅で流れるよう、だれの目にも快い。騎士コンラートは共に踊つたばかりに心の自由を奪われてしまい、この美しい舞姫に対する灼熱の恋に身を焦がすことになり、片時もその側を離れず、甘いことばの数々をふりまく。真剣かつ夢中に恋の道に挺身すること、悪戯好きの愛神に煽り立てられると、すぐさま世界が狭くなつてしまふ当世の小説の主人公のごとし。マテイルデ姫とて同じく、心は我が物ではない。勝ちは占めたが、占められもしたわけ。恋の初心者の初めての試みは上々の首尾だったが、琴線に触れてくるもうもの感情を女性の慎ましやかなヴェールの下に隠したり、ましてやさげない

素振りを見せるなんて土台無理。そこでうつとり魅了された十字軍士はまもなく、自分の恋もまんざら望みがないわけではなさそう、と気づいた。で、ひたすら心にかかるのはこの見知らぬ麗人の名前と住処^{すみか}。恋の成就にはどうしても必要なものである。けれどもここに至るとどう探りを入れてもだめ。相手は質問をすべていなしてしまう。大骨折ったあげく約束してもらつたのは、次の日また踊りにまいりますわ、ということだけ。そこで、彼女が万一ことばを違えるような場合には策略で裏をかこう、と思案をめぐらし、従者全員に麗人の住まいを探り出せるよう待ち伏せせよ、と指図。アウクスブルクの住人だと思ったからである。一方舞踏に参加した面々は、伯爵がこうも懃懃^{いんぎん}に乙女をもてなし、それはそれは愛想良^くうちかたらつていたので、彼女は彼の知り合いのひとりだと思いこんだ。

好い機^{しお}をみつけて、騎士の手を逃れ、舞踏場をあとにすることができないでいるうち、夜はすでに明け初めっていた。姫は広間から出るやいなや、林檎の香盒を三度手のなかで回しながらこう呪文を唱えた。



うしろには夜、前には昼を、

だれも私が見えないように。

そうして彼女は、すべての街路にあちこち張りこんでいた伯爵配下の早起き鳥たちに見つからず、自分の部屋に滑りこんだ。帰り着くなり、絹のドレスを戸棚にしまい、汚れた台所の働き着をまた身につけると、ゲルトルート夫人の鍵束で寝床からたたき起された他の召使よりずっと早くに仕事にとりかかったので、家政婦さんからちよつぴりお褒めのことばを頂戴したほど。

騎士にとってこの舞踏会のあとの一 日ほど長かつたためしはない。一刻一刻がさながら一歳の思い。憧れと渴望、あの突き止められなかつた麗人が約を違えるかもしれないという疑念と憂慮に居ても立つてもいられぬ。というのも猜疑は恋の道連れと決まつてゐるから。そしてこいつが、十字軍士の屋敷を飼い犬のグレー・ハウンドどもが駆けめぐるようすに、彼の頭のなかをぐるぐる。灯ともし頃、舞踏会のいでたちのしたくにかかつた彼は、前日より入念に装いを凝らし、貴族の昔のしるしだつた三つの黄金の輪が、このたびはダイヤモンドとともに襞襟の縁にちりばめられてきらめく。真先かけて悦びの闘技場に乗り込んだ彼は、参着してくる客たちを驚のような鋭い目でじろじろと検分、やきもきしながら舞踏会の女王が現れるのを待ち受ける。姫がようやく暇になり自室に引き上げて、はてどうしたものか思案する前に、宵の明星はすでに地平線のうえ高くに昇つていた。林檎の香盒に二度目のおねだりをするが、それとももつと緊要な人生の大業のためにとつておくべきか。理性という分別ある相談役は、後のほうにしなさい、と忠告するが、恋は、どうしたつて前のほうよ、とせつづいてならない。結局理性嬢は口を封じられ、あえなく日陰の身とあいなる。マテイルデが願つたのは、宝玉をちりばめた薔薇色の膨らみ袖のまた別のドレスで、内親王がたがお

召しになられるのと同様美々しく豪奢なもの。気の好い香盒はできるかぎりの品を提供したので、衣装の素晴らしいは期待を遙かに超え、マティルデは心も晴々と身仕舞いを整え、お守りの助けで人の目に触れることなく、あれほどじりじり待ち焦がれられている場所に到着。これがまた前日よりくらべようがないほど魅惑的で、十字軍士は彼女の姿が目に入ったとたん、歓喜に胸が轟き、地球の引力のようなあらがいがたい力が、踊り手たちの渦を割つて彼女のもとへ彼をぐいぐい引き寄せた。前に立つと、この乙女に再会する望みをすつかり棄てていたため頭と胸を震わせていた感情を、口籠もりながら述べる。気を取り直し、狼狽を隠そと、彼女をダンスにいざなえば、他の人たちは皆この素晴らしい一組が踊るのをみようと後ろへしりぞく。麗しい未知の婦人は冴えざえと、きらびやかな騎士の腕にすがつて滑つてゆく。そのままはさながら西風(ゼフール²⁹)に庇護される弥生の春の女神のよう。

舞踊が終わるとコンラート伯爵は、ちょっとと元気づけの飲み物を探しましよう、との口実で、疲れた相手を脇の一室に連れ込み、前日同様雅びやかな宮廷人のことばで甘いことばの数々を囁いた。けれども平静な外交辞令は知らず知らずのうちに思いのたけに変わり、妻になつてくださいませんか、と懇願する求婚者がかきくどくのが常の、細やかで情の籠もつた愛の告白で結ばれたのである。姫君は恥じらいながらも喜んで騎士の言うことに耳を傾けていたが、胸の動悸と頬の火照りが彼女の気持ちを露(あらわ)にしていたものの、ことばでどういうご所存か聞かせて戴きたい、と迫られると、しとやかにこう応じる。

「高貴な騎士のあなたさまが今日と昨日、優しく愛を語らつてくださいましたこと、大層嬉しう存じます。嘘偽りをおつしやるかたとは思いませぬゆえ。けれど私があなたさまと結婚いたすことは叶わぬことではございませんの。十字軍士の御身で、生涯妻は娶らないとの誓いをなさつておいででしょ。万一大きな恋のお遊戯の思し召しでしたら、如才ないおことばも無駄でございましてよ。ですから、一人が聖なる教会の掟に従い、神と人に対し夫婦の

契りを固めて結ばれるよう、どうあそばすおつもりか、どうか謎解きをしてくださいまし」。

騎士は真剣な面持ちで誠実にこう答えた。

「仰せられることは貞潔で聰明な娘御としては当然です。ですから私もこれから婚姻の件につきご説明いたし、ご疑念を晴らそうと私はいます。私が騎士修道会の一員となつた当時は、一族の相続人として兄ヴィルヘルムが存命でした。しかし兄が物故してこのかた、私は我が一族の末裔まつえいとして、結婚し、いつ何時たりとも修道会を去つてよい、との特別認可をあたえられました。したが、そなたに会う日まで女人との恋に縛られたことはありませなんだ。あの瞬間から私の心は一変、そなただけが妻として天から定められたかた、と固く信じております。お手を頂戴できるなら、二人の契りを分かつものは苦い死のみです」。

「よくお考えあそばせ」とこちらが応じて「後悔なさらぬかどうか。行いが先で思慮があと、これが随分と不幸せを作ります。私はあなたさまには未知の女。どんな家柄、どんな素性か、生まれと資産が釣り合う身なのか、それともみせかけにお目が眩まさされているだけなのかもご存じない。あなたさまのようなご身分のおかたは何事も軽々しくお約束はなさいませぬが、ひとたびうなわれたことは貴族のならわしでお破りにはなりませぬもの」。

騎士コンラートは急いで彼女の手を握り、それをひしと胸に当て、熱い愛情をこめてこう言った。

「魂と淨福にかけて誓います。もしそなたが」とことばを続けて「どんなに卑賤な者の子であろうと、清浄無垢な乙女でありさえすれば、そなたを妻として誠実に遇し、高い名誉をあたえます」。

それから彼は莫大な価値のあるダイヤモンドの指環を外し、赤心せきしんの証として相手の指に嵌め、その代償として彼女の貞潔な、これまで人に許したことのない唇から初めてのくちづけを受け、さらに「こうことばを続けた。

「そなたが私の約束を疑うことのないよう、三日間屋敷にお招き申し上げる。その場で私は、高位の僧侶や貴族な

どちら成る友人一同、それからその他の誉れ高い男たちに、われらの華燭の式典に出席してくれるよう、告げるつもりです」。

マティルデは全力を尽くしてこれを否もうとした。騎士の恋のテンポが急調子なのが気に入らなかつたからである。その前にまず彼女としては男の節操が永久に変わらぬものなのかどうか試したかつた。伯爵はどうしても承知してほしい、と言い張つて止まなかつたが、姫は諾否いはずとも答えぬ。前日同様暁となつて舞踏会がお開きになると、マティルデは姿をくらませ、一向眠気がさして来ない騎士はといえば、早朝から目敏い女中頭を呼び立て、豪奢な宴会の準備をせよ、と命じた。

死に神が大鎌を携えて大廈高樓やいぶせき藁小屋に恐ろしい骸骨姿を運び、出会う者すべてを情け容赦なく刈り取り、くびり殺す様子そのまま、宴会前夜ゲルトルート夫人は包丁を仮借ない拳におつとり、鶏小屋や家鴨小屋を巡り歩き、運命の女神のごとく家禽たちの生と死を一手に掌握した。ぎらぎら光る屠畜刀のもと、のんびりしていた住人とは何ダースと仆れ、いまはのきわに怖がつて翼をばさばさふるつた。鶏、鳩、愚鈍な去勢雄鶏などが、好色漢の七面鳥とともに横たわつてどくどくと血を流し、動物としての生涯を終えた。マティルデ姫は、羽をむしつたり、熱湯を掛けたり、はらわたを出したりで大忙し、おかげで一晩中甘い眠りにありつけなかつた。それでもこうした仕事はなんの苦労でもない。この大饗宴は自分のためにととのえられていることを承知していたからである。宴会の時刻となると、主人は喜色満面で客たちを迎えて飛び出る。門衛が鈴を鳴らすたび、彼はあのだれとも知らぬ恋人が訪れたのでは、とはやとちり。けれども扉が開かれると、入つてくるのはどこかの高僧だつたり、しかつめららしい老貴婦人だつたり、お偉い役人のだれそれだつたり。お客様はとつくな全員参集したとなつても、給仕頭は御馳走を食卓に並べるのをためらつていた。騎士コンラートは相変わらず麗しいいなづけを待ち焦がれていたのである。けれども

なんとも遅すぎるので、彼はとうとう内心憤りながら給仕頭に食膳の準備にかかるよう合図をおくつた。宴席について人々は食器類が一人前余計にあるのに気づいた。けれども、饗応の招きをないがしろにしたのはだれなのか憶測できた者はない。時々刻々主人役の陽気さは目に見えて減少、作った快活さでなんとか客たちをくつろがせていたが、額から憂愁の影をはらいのけることはもうできぬ。この鬱屈の酵母は団欒の悦びという甘いパンの練り粉をすぐさま酸っぱくしてしまい、食堂にはしんと陰気な雰囲気がただよい、通夜の食事もかくやとばかり。宵も更けたら舞踏曲を弾くてはすになつていたヴァイオリン奏者たちはお役御免となり、いつもなら楽しきいっぱいの伯爵邸の大饗宴は、今回ばかりは歌舞音曲なしで果てたしだい。

客たちは白けきつて早ばやと退散したし、騎士は矢も楯もたまらず独り自室に籠もり、暗い悲しみに身をゆだね、恋のはかなさをだれにも邪魔されずに思いめぐらした。寝台のうえで輶転反側、希望が潰えさつたのはどういうわけか、いくら考へても分からぬ。はらわたは煮えくりかえり、一睡もできないまま朝になつた。召使たちが部屋に入つてみると、主人は狂おしい幻覚に悶えていて、高熱に襲われている様子。屋敷中は大騒ぎとなり、医師たちは階段を上つたり下りたり、何尺もの処方箋を書き記せば、薬剤師の店では乳鉢にゅくばちという乳鉢がごおろごろ、がありがり、さながら早朝ミサを告げる鐘の響きのよう。けれども切ない恋の苦しみに効く唯一の薬草メノナグサメ（最愛の人）を処方した医者はなかつたから、患者は強壮剤もチンキ剤も服用を拒み、自分を苦しめないで、命の砂時計から砂がしだいに落ちるままにしてほしい、なまじ助けようとしてそれをまた逆さまにしないでくれ、と医師たちに懇請するのだった。

七日間というものコンラート伯爵は秘めた苦悩に憔悴しきり、薔薇色だった頬はげつそり、輝いていた双眸はどんより、生の息吹は唇のあいだから僅かにたゆたうばかり、吹き払つてほしいと微風そよかぜを待ち受ける谷間の朝霧のよう。

マティルデ姫は屋敷に起こつてゐることすべてを逐一知つてゐた。伯爵の招待を受けなかつたのはわがままでも冷淡な氣取りでもない。恋人のことばにこのたびは従つまい、と決意を固めるまで、頭と胸、理性と情熱のあいだには激しい闘いがあつたのだった。ひとつにはせつかちな相手が心変わりをしないかどうか見定めたかつたし、またひとつには林檎の香盒に最後の願いを叶えてもらうのを躊躇したからである。つまり花嫁としてはまた新しい衣装が必要と思つたのだが、代母さまには、願い事をするときはよくよく考へるのですよ、と忠告されている。そこで饗宴の当日彼女はすっかり傷心し、隅っこに座りこんで、むせび泣いていたのだった。どうしてそうなつたのか、原因のよく分かる騎士の病気に彼女の不安はいや増すばかり。彼が危篤になつたと聞いて、絶望のどんぞに落ちこんだ。

医師たちの診断によれば七日目が生死の分かれ目だということだった。マティルデ姫が恋人に生きてほしいと思つたことは容易に推測できる。また、多分自分が恋人の回復に役立つだろうということも、彼女は知らないわけではなかつた。ただそれにどういう手だてを講ずればよいか、これが難問だつた。けれども愛が目覚めさせ花開かせる何千もの能力のうちには、創意工夫に富ませてくれるというのも含まれている。マティルデは、いつもの通り朝まだき、食事の献立について相談するために女中頭のところに行つた。けれどもゲルトルート夫人は取り乱していく、ごくあたりふれた事を考えることも、料理をどう選ぶかもできず、軒の雨垂れみたいな大粒の涙がなめし革のような頬を転げ落ちる。

「ああ、マティルデ」と彼女は啜り泣いた。「わたしらはもうすぐこのお屋敷からお暇がでてしまつよ。旦那さまは今日一日のお命もあるまいよ。」

これはひどく悲しい知らせで、マティルデ姫は驚愕のあまりよろりと倒れそうになつた。しかしすぐ気を取り直して、こう言つた。

「……主人さまのお命のことにつくづくなさつちやいけませんわ。お亡くなりにはなりません。お元気になられます。あたし、今朝がたいい夢を見ましたの」。

老女は二本脚の夢占いの本さながらで、屋敷の使用人のどんな夢でも聞きただし、獲物を手に入れるとなんのかんのと解釈するのだが、彼女の考え方ひとつでどうにでも的中する。極上の夢でも婆さんにかかると喧嘩、口論、口小言の前知らせというわけ。

「おまえの夢つてのを言つてごらんな。わしが解いてやるよ」と老女。これに応えてマティルデが語る。

「まだうちの母さんのところにいるみたいでした。母さんはあたしを側へ呼んで、九種類の薬草の入ったスープの作り方を教えてくれました。そのスープは三匙飲むだけでどんな病氣にも効くんです。『これをご主人さまにこさえてあげるんだよ』って母さんは言いました。『そうすりやお亡くなりにはならないで、すぐお元気になる』」。

ゲルトルート夫人はこの夢の話にとてもびっくりし、今回は寓意のある意味付けをするのは差し控えた。

「へんてこな夢だねえ」と彼女。「そりや偶然じやないよ。大急ぎでおまえのそのスープを用意しな。朝御飯にね。わしは旦那さまがそれを召し上がる気になるようにさせられるかどうか、やつてみる」。

騎士コンラートはしんと物思いに沈んだままぐつたり力なく横たわり、浄土への回帰の心準備のため、終油の秘蹟⁽³²⁾を受けたいと願っていた。そこへゲルトルート夫人が入つて来て、三寸不爛⁽³³⁾の舌をふるい四終⁽³⁴⁾の考察から彼を無理やり引き離し、善意溢れる長広舌で苦しめたものだから、こちらはそれを免れたいばかりに、相手の要求を呑むことを約束。一方マテイルデは素晴らしい濃厚スープをこしらえ、それにあらゆる種類の香味野菜と貴重な薬味を入れた。調理が済むと彼女は、騎士から赤心の証として渡されたダイヤモンドの指環を深皿に入れ、従僕に持つて行かせた。

病人は、まだ耳の底でじんじん鳴っている女中頭のかしましいおしゃべりが怖くてならなかつたので、しかたなく

一匙スープを口に運んだ。ところが皿の底になにか異物があるのに気づき、それを掬いあげてみると、なんともびつくりしたことに、見つけたのは例のダイヤモンドの指環。彼の目にはたちどころにまた命と青春の活気が輝き、ヒポクラテス顔貌⁽³⁴⁾は消え失せ、食欲をありありと見せて鉢をすっかり空にしたので、ゲルトルート夫人と、傍に待つていた従者は大喜び。皆この法外な治癒力はスープのお蔭と信じこむ。騎士は指環を周囲の者に隠してしまったのである。それから彼はゲルトルート夫人の方を向いてこう言つた。

「このスープを調理したのはだれだね。これは私の体にいいし、元気をつけてくれ、生きる力を取り戻させてくれたよ」。

老女は用心深く、回復し始めた病人は今のところ安静が大事、あまり話さないのが一番、と思ったので、こう言った。

「殿さま、このスープをこしらえた者のことなどお気づかいなさりませぬよう。ご病気を直す効き目がこれにあつたのは、あなたさまにも、それを念じておりましたわたちらにも、めでたいことでござりまする」。

けれども騎士はこの返事に満足せず、真剣な面持ちで自分の問いに答えるよう言い張つたので、女中頭はこう報告した。

「娘っ子がひとりお台所に奉公しておりますが、通り名はジプシー女で。これが薬草やら植物やらの効能に詳しく述べさまその子をここへ連れておいで」と騎士。「この命の万能薬の礼を言いたい」。

「申し訳ございませんが」と家政婦は応える。「あれをお目通りさせますと、ご不快になられるかも知れませぬだで。娘^{むすめ}みたいななりかたちで、背中に瘤^{ぶぶ}がございます。汚い着物を着ておりますし、顔も手も煤と灰でべつとりでござ

います」。

「言いつけ通りにしなさい」と伯爵はきつぱり申し渡す。「ぐずぐずするでない」。

ゲルトルート夫人は仰せかしこみ、急いでマティルデに台所から自分のところへ来させ、ミサにでかける時いつもかぶつて行く雨よけショールを投げかけ、そのみなりで病室へ連れて行つた。騎士は人払いを申しつけ、扉を閉めるよう命じると、こう言つた。

「少女よ、素直に話してくれ。どうしてそちは、わしが鉢の中に見つけたあの指環を手に入れたのだ。あの鉢に入つていたわしの朝食を作つたのはそちであろう」。

「騎士さま」と姫は慎ましくとやかに答える。「あの指環は私があなたさまから頂戴した物でございます。楽しい輪舞の二晩目、あなたさまは私に愛をお誓いになりながら、あれをくださいました。さあ、私の姿と素性に、世をはかなまれておられるのでは、と思えるほど、苦しんでおやつれになられるだけの値打ちがあるかどうか、とくとごらんあそばしませ。私、おからだが心配でたまらず、あなたさまのお迷いを醒ますのを、これ以上待てませんでした」。

恋にこういう解毒剤があるとは思いもかけなかつたコンラート伯爵は、とむねをつかれてしばらく黙りこんでしまつた。けれども魅惑溢れる舞姫のあの面影がすぐにまたよみがえり、それと今日の当たりにしている正反対の姿とをどうにも重ね合わせることができなかつた。もちろん、自分が恋煩いなのを見抜いた者が、うまく騙して治してやろう、としているのでは、という考えも浮かんだが、手元に返された指環が真物であることから、あの未知の麗人がこれにどうかして関わつていてるに違いない、とも思える。そこで彼は、だれかに唆そそのかされていると見受けられるこの小娘を探りを入れ、話しながら尻尾をつかまえてやろう、ともくろんで、こう口を切つた。

「そなたが、この目が愛でいつくしみ、この心の誠をささげる、と誓つたあの典雅な乙女であるなら、私がした約束を衷心から果たすということをお疑いにならないでほしい。したが、私をゆめ欺こうとなさるな。そなたが二夜続けて舞踏場で見せてくれた容姿をふたたびとりもどすことが叶うなら、体を若い櫻の樹のように真っ直ぐすらりとすることが叶うなら、蛇がやるようにすりきれた皮膚を脱ぎ去り、カメレオンのように肌色を変えることが叶うなら、私がこの指環をあたえた折り、口にしたことばは必ず守り、違えはせぬ。しかし、そなたがこの条件に応ずることができないなら、この指環をどうして手に入れたか申すまで、悪い下女として笞打うつちたせようぞ」。

マティルデは嘆息した。

「ああ、騎士さま。あなたさまのお目がくらまされたのは、なりかたちといううわべの虚飾に過ぎないのでござりますか。悲しい身になりましたよ、私。時か偶然かが、こうしたうつろう魅力を滅ぼしてしまいましたら、寄る年波がこのしなやかな体をかがめ、私の背中をゆがめましたら、肌色の薔薇、百合の白がしおれるときがまいりました。すべすべした肌がくしゃくしゃと皺しわばみましたら。今私がお目の前でまとつておりますこの仮の姿が、いつか本当の姿となりましたら、そのときには、お誓いになられたご貞節はどこかへ消えてしまいますの」。

騎士コンラートは厨女くりやにしてはあまりにも聰く、あまりにも思慮深いこうしたことばに驚嘆し、こう答えた。

「さよう、美しさは男心を絡め取る。しかし、貞潔こそ愛という柔らかな紐でそれを繋ぎ留めておくことができるのです」。

「それでは」と彼女は言った。「あなたさまの条件を満たしにまいります。私の運命を定めるのは、お心任せにいたしましょう」。

十字軍士は相変わらず明るい希望と恐怖の狭間を行つたり来たり。鈴を鳴らして女中頭を呼び、こう命じた。

「」の娘がきちんとみじまいするよう、この子について部屋まで行き、出て来るまで扉のところでじつとしている。そなたたちを接見の間で待つていて。

ゲルトルート夫人は、主人の言いつけがどういうことなのか、さっぱり呑みこめないまま、囚人の娘を厳重な監視下に置いた。階段を上りながら彼女はこう尋ねた。

「おまえ、晴れ着があるのかい。どうしてそれをわしに黙つていたんだね。でも持つてないんなら、わしの部屋までおいで。入り用なだけ貸してあげる」。

こう言うと、半世紀前それをまとつて男を惑わせた古風な衣装の数々を、昔を楽しく回顧しながらひとつひとつ述べ立てたが、マティルデはそのことばにはろくに注意をはらわず、ただ石鹼のかけら、片手一杯の小麦糠がほしいと言ひ、水を洗面器に入れるとそれを持つて自分の部屋に上がり行き、中に入つて扉を閉めてしまつた。ゲルトルート夫人は命じられた通り、外から大いに念を入れてそれを見張つていた。十字軍士はおのれの恋の冒険がいかなる結果を迎えるのかわくわくしながら寝床を離れ、このうえもなく優雅に服装をととのえ、大広間におもむいたが、真相が判明するまで長いこと待たなければならなかつたので、せかせかとした足取りで落ち着かずにあちこち歩き回つた。けれどもアウクスブルク市庁の異国製の時計の針が正午に十八時を指したとき⁽³⁵⁾、観音開きの大戸がまつたく不意にさつと開き、控えの間をさやさやと絹の衣装の裳裾の擦れる音がして、マティルデ姫が花嫁のようにきらびやかなよそおいで、オリンポスの神々の宴からパフォスにもどつて来たときの愛の女神のように麗しく、優美に、そしてしずしずと入室したのである。騎士コンラートは、歓喜に酔い痴れた恋人なら当然のうつとりした顔で叫んだ。

「そなたが女神であろうと死すべき人の子であろうと、さあ、この通り足元に膝まづきます。そなたに立てたあの誓いをいとも聖なる婚姻の宣誓によつて継続いたさねば。私の手と心臓を受けるのにあたいするのは、そなたをおい

てありはしませぬ」。

姫は慎ましやかに騎士を助け起こして言つた。

「騎士さま、お心をお鎮めなさいませ。ご誓言をお急ぎあそばしますな。あなたさまはこうして私の本当の姿をさらんになつておられます。それ以外は私のことをご存じない。すべすべした顔に騙された殿方はこれまで少なくありますね。それに指環はまだお手の中に」。

騎士はすぐさま指からそれを抜き、彼女の手に嵌める。そこで姫はいとしい騎士に身をゆだねた。

「これからはあなたさまが私の定めの夫ですわ。そのおかたに、私これ以上身分を包んではいられません。私は名譽ある騎士ヴァッカーマン・ウールフインガーの娘です。父の不幸な末路のことはさだめしご承知のことでしょう。私は父の館が滅亡いたしました折り、辛くも逃れ出て、憐れな姿ではありましたが、お住まい無事にかくまつて戴きましたの」。

それから彼女は身の上話を騎士に物語つた。林檎の香盒の秘密も隠しておかなかつた。コンラート伯爵は瀕死の病だつたことなどけろりと忘れ、次の日ふたたび、前日彼の陰鬱な様子に早ばやと退散した客人たちをすべて招待、いいなづけとの婚約を披露した。給仕頭が配膳をすませ、ひとわたり数を数えてみたところ、このたびは食器類はぴたりと人數分そろつていたわけ。次いで騎士は修道会から還俗、別邸を出、いとも絢爛豪華に婚儀を執りおこなつた。この人目を引いた家移りの際、働き者のマルタ⁽²⁾たるゲルトルート夫人は何の役にも立たなかつた。というのも、見張つていたマティルデ姫の部屋の扉が開いて壯麗な身なりの貴婦人が姿を現したとき、びっくり仰天した老女は椅子からあおむけにひっくりかえり、片方の太股を脱臼、生涯腰が萎えたままで終わつたからである。

新婚の夫婦は当初の一年をアウクスブルクに住み、エデンの園の最初の人間の妹背のよう⁽³⁾に至福と無上の悦びにひ

たつて過ごした。身も心もうつとりさせてくれる情愛に満たされた若妻は、しばしば夫君の胸に寄り添つて、どんなに幸せな気持ちか、今や無限定で自分の所有に帰した彼の心に打ち明けるのだった。

「大切な旦那さま」とあるとき彼女は思いのだけをつくしてこう言った。「あなたに娶つて戴けて、私もうこれ以上何も願い事はありませんわ。林檎の香盒に、三番目の願いは叶えなくていいと喜んで言いたいほど。でもあなた、お胸のうちに何かお望みを隠していらっしゃるなら、教えてくださいな。それを私の願いにします。そうすればすぐ成就いたしますよ」。

コンラート伯爵はいとしい妻を両腕に抱きしめ、結婚の永続以外に望ましいことはこの世にはない、と固く断言した。そういうわけで、林檎の香盒はその女主人の目には何の価値もなくなり、ただ代母のニクセのありがたい思い出のよすがというだけで、手元に置いておいたのである。

コンラート伯爵の母はまだシュヴァーベックの寡婦相続分の莊園で存命だった。気立ての優しい嫁は、この女性が雄々しい子息を産んでくれたことに感謝するため、娘としての愛情こめてその手にくちづけしたい、とかねがね切望していた。しかし伯爵はなんのかのと口実を設けて母詣でを拒むのが常で、その代わり最近彼のものとなつた采邑へ遊山旅行を提案した。この土地はヴァッカーマンの破壊された山城から遠からぬところにあつた。マティルデは、少女時代を過ごした地方を再訪したかつたので、喜んでこれに同意した。父祖の住まいの廃墟を訪れた彼女は、両親の遺灰に涙をそぎ、二ヶセの泉におもむき、こうして自分が来たことで、水の精が姿を現す誘いになればいい、と思つた。少なからず石を泉に投げ入れても期待した効果はなく、林檎の香盒でさえ軽い水泡のように水面にぶかぶかするだけ。またみずから拾い上げるのに苦労しなければならなかつた。洗礼に立会いの機会が再び到来しても——といふのはマティルデ夫人のおなかに赤ちゃんが授かつたので、夫君は大喜びしたのだが——水の精はもはや出現しな

かつた。彼女が産んだのは神々の御子のように綺麗な男の子。両親はうれしくてたまらず、熱愛のあまり子どもを押し潰さんばかり。伯爵は嬰児の世話をさせるため気が利いた乳母を雇つたのだが、母御前は腕の中から放さず、この小さなあどけない天使がすやすやするのを見守り続ける。けれども、祝宴に陶酔して館のなかの者すべてが深い眠りに落ちていた三夜目、やはり安らかなまどろみに襲われた母君がふと目を覚ますと、抱いていた子どもが消え失せている。驚愕した伯爵夫人は狼狽して叫ぶ。

「乳母や、そちは私の赤ちゃんをどこに寝かせました」。

乳母は答えて、

「奥方さま、若君さまはお腕のなかですわ」。

寝台と部屋が綿密にくまなく調べられたが、寝室の床に数滴小さい血痕があつたほかには何ひとつ見当たらない。

乳母はこの血痕を目に留めると、大きな叫び声をあげた。

「ああ、神さま、そしてありとあらゆる聖者さまがた、お慈悲でござります。⁽³⁹⁾人狼がやつてきて、お子をさらつて行つたんだわ」。

産婦はいとしい男の子の失踪を嘆きに嘆いて青白く痩せ衰えてしまい、父親は悲しみにうち沈む。人狼の存在を信じる気持ちなど芥子粒ほどもなかつたが、さりとてこの事態を説明しようもない彼は、こうしたたわごとを言われるがままに聞き流し、絶望した妻をひたすら慰める。こちらは、悲嘆悲劇の大嫌いな夫君を思いやつて、強いて明るい態度をよそおうのだった。

時間は苦悩を鎮めてくれるもの。この親切な時がとうとう母親の傷心を癒し、愛が代償として一番目の男の子を授けてくれた。りっぱな跡継ぎの誕生に伯爵の宫廷の喜びは際限もない。伯爵は気も晴々、近隣の人々とともに周辺へ

日帰りの旅をして祝う。喜びの杯は、新生児の健康を祝して、上は主人や客たちから、下は塔の見張り番にいたるまで、ひつきりなしに手から手へとめぐる。気遣い多い母君は赤ちゃんを片時も体から放さず、力の及ぶ限りは熟睡するまいと努めていた。しかしどうとう自然の要求に屈せざるをえなくなると、彼女は黄金の鎖を頸から外し、それを坊やのおなかに巻き付け、片端を自分の腕に縛り、人狼がちよつかいを出せないよう、自分と子どもの上に聖なる十字を切つた。それからすぐにあらがいがたい睡魔に襲われた。朝の光が射し始めたとき彼女ははつと目を覚ましたが、おお、なんということ、可愛い男の子は彼女の腕から消え失せていた。驚愕した夫人は前のように叫ぶ。

「乳母や、そちはわたしの赤ちゃんをどこに寝かせました?」

またしても乳母は答えて、

「奥方さま、若君さまはお腕のなかですわ」。

夫人がすぐさま胸に巻き付けておいた黄金の鎖を見ると、鋭い鋼鉄の鍔で輪がまっぶたつに切断されているのに気づき、驚きのあまり気絶してしまう。乳母が騒ぐので、召使たちが慌てふためいて駆けつける。そしてコンラート伯爵はこの椿事を耳にすると、激怒と苛立ちに燃え、乳母の頸を切り落とすと、騎士の誉れの太刀を引き抜く。

「この呪われた女郎めが」と彼は恐ろしい声音でどなつた。「一晩中起きておれ、けつして息子から目を離してはならぬ、化け物がまいつてあの子を眠っている母親から奪い去ろうとしたら、悲鳴をあげて館中を起こし、我らが人狼を追い払えるようにせよ、と、わしはきさまに内密で命じておかなかつたか。このねぼすけめ、眠るがよい。長い死の眠りをな」。

女は彼の前にひざまづき、こう言った。

「我が君さま。神さまのお慈悲にかけてお願いいいたします。すぐさま手前をくびり殺してくださいまし。そうすれ

ば手前が目にいたしましたあさましい行いを墓場へ持つてまいります。ご命令になりますても、褒美をやるとおつしやいましても、あんなことは手前の口から洩らすことではございません。拷問でむりやり引き出されでもしないかぎりは」。

びっくりした伯爵が訊く。

「お前が目撃したと申すそのあさましい行いはどういうことか。お前の舌が到底語れぬほど忌まわしい行為なんか。拷問にかけられずとも、知つておることを白状したほうがよいぞ。忠実な召使としてな」。

「殿さま」と女は溜め息をひとつ。「どうして御身のご不幸を無理にお聞きになりたがるのです。ああしたおぞましい秘密は、手前の亡骸もろとも冷たい墓穴に埋められたほうがよろしいのでござります」。

このせりふにますますその秘密とやらを聞きただしたくなつたコンラート伯爵は、女を脇へ呼び、自分の私室に連れこんだ。おどしたり、すかしたりのあげく、説得された女はあることを打ち明けたが、伯爵としては知らずにいたほうがどんなに増しだつたか、という思い。

「奥さまは」と女。「申しあげますけど、あさましい魔法使いなんですよ。けれどもおそろしくあなたさまを愛しています。あまり愛してるものですから、あなたさまのご寵愛やご自分の美しさがいつまでも変わらずにいられるような薬を作るためになら、我と我が子を生贋にすることだつてためらわないんです。夜、だれもが安心して寝こんでいましたとき、あのひとはうとうとするふりをしてました。手前もなぜだか分かりませんが、同じ真似をしてました。それからすぐ、あのひと、手前の名を呼びました。でも手前は返事をしないで、喉をがあがあ、鼻をぐうぐうさせしていました。するとあのひと、手前がぐつすり眠つているもんだと思いこんで、さつと寝台のうえに座り、赤ちゃんと抱くと、ぎゅっと胸に押しつけて、いとしげにくちづけし、こんなことばを囁いたんですが、それは手前には

はつきり聞こえました。『可愛い坊や、おまえの父さんの愛をあたしに繋ぎ留める薬におなり。これからおまえのお兄ちゃんのところへおいで。無垢な坊や、九種類の薬草とおまえのちいちな骨から、あたしは強い効め目の飲み物を作る。それはあたしの美しさとおまえの父さんの愛情をあたしにあたえてくれるのだよ』。こう言いおわると、ダイヤモンドの飾り針、匕首^{あいくちゅう}のように鋭いのを髪から抜くと、それで素早くお子さまの心臓を突き刺して、ちょっぴり血を出しました。お子さまがもがかなくなると、あのひとはその体を前に置き、あの林檎の香盒を手に取ると、それに向かつてなにやらぶつぶつ唱えごとをしました。それから蓋を開けますと、中からまるで瀝青^{タール}の樽から出るみたいに炎がぱっと燃え上がり、亡骸をほんの僅かなあいだに焼き尽くしてしまったんです。あのひとは灰とお骨を丹念に箱に収めると、寝台の下の櫃のなかにそれを押しこみました。それが済むと、突然眠りから覚めたような心配そうな声で叫んだんですよ。『乳母や、そちはわたしの赤ちゃんをどこに寝かせました』って。それで手前は、あのひとに魔法でやられるんじやないかとびくびくしながら、おつかなびつくり『奥方さま、若君さまはお腕のなかですわ』と答えたのです。それを聞くとあのひと、絶望したような芝居を始めたんで、手前は助けを呼ぶふりをして部屋から外へ駆けだした、というわけなんでござります。あの、殿様、これがその、どうしてもあなたさまが手前に言わせたがつたあさましい行いの顛末なんで。手前の申しあげたことが本当だ、と灼けた鉄の棒で宣誓してもよろしくござります。手前それを素手で持ち、お館の中庭を三度往復いたします』。

騎士コンラートは石のように凝然^{ぎょうぜん}と立ちすくみ、長いこと黙りこくっていた。ようやくなんとか気を取り直すと、言つた。

「火の試みがどうして要ろう。そのことばにはまゝとの刻印が捺されておるわ。なにもかもそちが言つた通りだ、と感じもするし、思いもする。この厭わしい秘密をそちの胸に固く封印し、だれにも、司祭に告解する折りにも、口

をつぐんでいてくれい。わしはそちのためにアウクスブルクの司教の免罪符を手に入れよう。その罪がこの世でもある世でもそちの身に帰されぬようにな。わしはこれから何事もないような顔をよそおい、あの蝮蛇の部屋にまいる。そちは重々気をつけてな、わしがあれを抱いて、慰めのことばをかけておるあいだに、遺骨の入った箱を寝台の下から取り出して、そっとわしに渡してくれい」。

こうして、額を少し翳^{かげ}らせ、衝撃を受けはしたが毅然とした眼差しで、妻の部屋に脚を踏み入れる。こちらは心は悲しみにかきぐれながら、罪のない目で黙つて迎える。そのかんばせは天使のそれにも似て、伯爵の胸を煮えかえらせている怨みつらみをさつと吹き消した。復讐の気持ちが思いやりと憐憫^{れんび}に和んだ彼は、不幸な妻を心から胸に抱くと、妻は夫の服に憂愁に満ちた涙をどつと注ぐ。慰め、優しく語らつてから、彼はすぐまた恐怖と惨劇の現場を急いであとにした。例の乳母はそのあいだに言われたことをやつてのけ、こつそり恐ろしい骨の容器を伯爵に手渡す。魔法使いと思われる妻をどう処置したものが覚悟を決めるまで、彼の胸のうちでは苦しいせめぎあいがおこなわれた。とうとう彼は事を荒立てずおおやけにしないで彼女を始末してしまおうと決心、馬にまたがり、アウクスブルクへおもむいたが、その前に家令にこう命じた。

「伯爵夫人が九日後、部屋を出て、ならわし通り湯浴みをすることになつたら、浴室をしたたかに熱くさせ⁽⁴⁾い。そして外側から扉に門を下ろし、あれが高熱のため衰弱し、生きておられぬようにいたすのだ」。

家令はこうした指図を聞いて悶々と悲しみに沈んだ。なにしろ館の使用人は皆、おだやかで慈しみ深い女主人であるマティルデ伯爵夫人が大好きだったからである。けれども騎士がひどく厳しい面持ちで激昂しているのが分かつたので、あえて口をさしはさむ勇気が出ない。九日目マティルデは風呂を焚くよう言いつけた。夫はそうそうはアウクスブルクに滞在はすまい、もどつてきた折りに悲劇の産褥^{さんじよ}の名残が一切消えているようにしたい、と考えたのであ

る。彼女が浴室に足を踏み入れると、ひどい熱さのため空気が身の回りで震えているのが目に見えたので、きびすを返そうとした。しかし強い腕に無理に浴室におしもどされ、すぐさま扉も外から門をかけられ、閉ざされてしまった。彼女は助けを求めて叫んだが無駄だった。耳を貸す者はひとりもなく、火はますます烈しく煽り立てられ、炉は陶器を焼く窯のように真っ赤に灼熱。

こうした状況に伯爵夫人はここで何が起こっているのかすぐに理解、甘んじて死のうとした。ただこうもあろうかと彼女が推察したおぞましい嫌疑だけが、このむごたらしい死よりも彼女の心をさいなんだ。まだ最後の意識がある僅かなあいだに彼女は髪から一本の銀の飾り針を抜き、それで浴室の白い壁にこんなことばを書きつけた。

「さようなら、コンラート。私はあなたのご命令通り喜んで

死にます。けれども罪はありません」

それから寝椅子にぐつたりとくずおれ、死との闘いを始めた。

しかし人間の本性は切羽詰まつたときには滅亡を防ごうと知らず知らず努力するもの。息を詰まらせる熱の恐怖に駆られ、この不幸な瀕死の女性が身悶えしているうちに、いつも身につけていた林檎の香盒がぼろりと床に落ちた。彼女はやおらそれを手に取り、こう叫んだ。

「代母のニクセさま、お力が及びますなら、むごたらしい死から私をお救いください。そして無実を晴らしてくださいまし」。



急いで蓋を開けると、林檎の香盒のなかから濛氣^{もちき}が立ちのぼった。これが部屋中にひろがつて、伯爵夫人に心地よい冷気をもたらすと、岩窟のしつとりした靄^あが灼けるような熱さを呑みこんだにせよ、代母が天敵である火の元素に、水の精⁽⁴⁾としての対抗力を用いて勝利をおさめたにせよ、彼女はもう不安も熱も感じなかつた。もうもうとした靄がまとまるといつつの形をとつた。いまはもう死ぬことなどすっかり忘れたマティルデは、ことばでは尽くし難い歓喜に溢れて、目の前の優しい水の精を見つめた。ニクセは、片腕の中に洗礼肌着⁽⁴²⁾をまとつたいとけない乳飲み子を抱き、片手では紅のリボンで飾られた白い天使袖の服⁽⁴³⁾を着た年長の若君の手を引いていた。

「ようこそ、いとしいマティルデ」と水の精が語りかけて「林檎の香盒が叶えてくれることになつて三つ目の願い事を、最初の一いつみたいに軽はずみに使ってしまわないでよかつたこと。さあ、ここにそなたの無実の生き証人を一人連れて来ましたよ。この子たちは、そなたがあやうく敗れるところだった忌わしい説謗^{せきぼ}にそなたを勝たせてくられましょう。そなたの人生の悪い星回りはもう衰えてしまいました。今後は林檎の香盒が願いを叶えてくれることはありません。なぜつてもう、こうだつたらいいのに、と思うようなことはありませんもの。でも、今度の辛いめぐり会わせの謎解きをしてあげましょうね。あのう、そなたの夫の母親がすべての不幸の源なのです。息子の結婚はこの高慢な女の胸への匕首のひと突きだったのです。あの女は、コンラート伯爵が高貴な血統を厨女を娶ることで汚した、とひたすら思いこみ、彼を呪いのしり、もう実の息子とは認めないと言い切りました。それからというもの、あれは寝ても醒めても一筋にそなたを滅ぼすことだけしか考えない。もつともそなたの夫が用心深く目を光らせてこうしたよこしまなもくろみを防いでいましたけれど。それでもなお、猫かぶりの乳母を使ってその裏をかくことに成功したわけ。莫大な報酬を約束して彼女はうまうまとあの女に、そなたの初子⁽⁴⁴⁾の男の子を眠つてゐるそなたの腕から奪い、仔犬みたいに水に投げこませたのです。幸いあの女は私の岩窟の清水をこの凶行のために選んだので、私は坊やを大

切に抱き留め、お母さまのように世話をしました。あの女ときたら、私のいとしいマティルデの一番目の息子も同じく私に託したもの。この悪巧みの達者な乳母がそなたを譴訴し、伯爵に、そなたが魔法使いだの、林檎の香盒（あれの秘密はもっと注意深く守らなきやいけませんでしたよ）から出た火の精の炎が、遺灰から媚薬をこしらえるために、坊やたちを焼きつくした、だと吹きこんで、信じさせました。女はそなたの夫に鳩と鶏の骨の入った容器を手渡し、こちらはそれを自分の子どもたちの遺骨だと思い、留守中にそなたを浴室で窒息させるように命令を出したのです。あの人は今、後悔しきつて、この残酷な指図をできれば取消したいと念じながら、アウクスブルクから急いでやって来るところです。相変わらずそなたを有罪だと思つてゐるのですけれどね。ほんの数時間もすれば、そなたは無実の証が立つて、あの人の胸に抱かれていることでしょう」。

水の精はこう言いおわると、伯爵夫人の顔のうえに身をかがめ、額にくちづけすると、返事も待たずに、濃い靄のヴェールをまとう

と、見えなくなつた。

一方伯爵の下僕たちは消えた火をせつせとまた燃え立たそうとしていたが、内部で人声が聞こえるような気がしてならず、伯爵夫人はまだ生きているようだ、と判断した。しかし、どう骨を折つても、いくら鞴を使つても甲斐はなく、薪は燃えつかず、炉の燃料は雪



の王かと思われるあります。その後まもなく伯爵が騎馬でもどり、不安に駆られながら、妻はどうした、と訊ねる。下僕たちが、風呂をよくよく熱くいたしましたが、急に火が消えてしまい、どうやら伯爵夫人はまだご存命らしゅうござります、と報告する。それを聞いて彼の胸は喜びに高鳴り、扉のもとに歩み寄り、鍵穴からこう叫ぶ。

「無事か、マティルデ」。

そして伯爵夫人は夫の声を聞いて、こう答える。

「いとしい旦那さま、息災であります。それに坊やたちも元気」。

このことばに仰天した伯爵は、鍵が手近になかったので、待ちきれずに扉を打ち壊させると、浴室に飛びこみ、善良な妻の足元にひれふし、彼女の清淨潔白な両手を取つて、さんさんと流れる悔いの涙で濡らす。そして館全体が歓呼して欣喜雀躍するなかを、妻と、夫婦のいとしいかすがいたちとを、おぞましい死の部屋から連れだして居室に向かい、妻の口からこのたびのよこしまな中傷と子盗みの一部始終を聴取。即刻彼は、悪者の乳母をとらえ、風呂場に閉じこめよ、と命じた。すると炉の火は愉快そうに燃え上がり、炎は高く渦巻き昇り、鬼のような女はその忌まわしい魂をたちどころに浸み出させてしまつた。

解説

この話は、さまざまの民間伝承や、民間伝承を材料とした創作昔話を構成するモティーフを、十八世紀の文人ムゼーウスが無理なく結びつけた、やはり創作昔話である。その種はこれこれである、と正確に挙げることは不可能と思う。けれども、そうしたモティーフを含んでいる話として容易に思いつくのは、グリムの『子どもと家庭のための昔

詫」(Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm)「マコトの子」(KHM 3 Marienkind)〈女主人公の子が二人まで
 もうねれ——」^{モウネレ}「れば聖母マリアのしわせなのに、もとよりややかで、辯せな状態で返してゐる〉、「兄
 と妹」(KHM 11 Brüderchen und Schwestern)〈熱い風呂で女主人公が殺されぬ〉、「灰かふく」(KHM 21
 Aschenputtel)〈貴公子と踊り、その場から逃げだす〉、「千ひぬ皮」(KHM 65 Allerleirauh)、ハヤルル・ペローの
 「驥馬皮」(Peau d'âne)〈顔、両手を煤で汚すない身をやつして奉公〉、元の美しいむらじて貴公子と踊り、証拠
 の宝飾品をステープに入れる〉、同じくペローの「眠りの森の美女」(La Belle au bois dormant)〈結びが酷似〉など、
 および、そのもととなつた民間伝承である。

更に訳者のせかしらを少々付け加える。

水の精が、フランスの一七〇〇年前後のペローやその影響を受けた才媛たちのものした妖精譚における、よき妖精
 の役割を果してゐるのは、あまりドイツ的と言えないのでは、と感じた。

P・ツァウネルト篇『グリム以降のドイツの民話』所収五十八番「伯爵令嬢と水の精」(Hrsg. v. Paul Zaunert:
 Deutsche Märchen seit Grimm. Nr. 58 Die junge Gräfin und die Wasserfrau)には確かにそつだが、これはムゼーウス
 の物語が民間に入り、再び口承として採録されたものと思つてよいのではないか。

女主人公が父に、そして父のヴァッカーマンが末娘に、なんの情愛も示さず、お互いまことに没交渉な点、女主人公
 公が結婚後、同一市内の修道院に隠棲を強ひられてゐる(はずの)実の姉一人に、どのように接したか言及がない点、
 」の一点は民話の精神と共通してゐる。本筋と関係ない場合、通常の人情の発露は語り手、聞き手の心から切り捨て
 られるので、それはそれでよろしいのである。ムゼーウスの感覚はよいやう思へ。

ゆづれ、コンラート伯爵のみずからの母親への復讐が記されてゐるが、その手先の処罰に留まつてゐる点は、民

話的ではなく、より文人的で、さすが男主人公の実母をこのよくな因果応報の目に遭わせるのは、この物語では忍びなかつたか。繼母ならよいようで、「リヒルデ」では、繼母が灼熱の鉄の舞踏靴を履かされている。

原注

(1) 木製の林檎の形をした香盒 林檎の形の香盒も胡桃の形の麝香入れも意味上同一のようである。どちらも香油(バルサム)入れ、もしくは匂袋のこと。初見は(旧約)聖書イザヤ書三章二十節。(訳者補足→手元の日本聖書協会刊行文語訳聖書(一九五七)では、「華冠(カハラ)輕飾(カハラ)、紳香盒(シンカハラ)、符囊(マモダラ)」、同協会刊新共同訳(一九九三)では、「匂袋(ノシナガ)……」となっているが、この物語では木製なので、「香盒」を訳語として選んだ)。

(2) ひるがえる一筋の紗で飾られた……すべて閉ざされている この、家族の一員の死去を告げる古いドイツの習俗は、クレーフェ公爵領(訳者補足→ライン河口近くの古都クレーフェを中心とするオランダとの国境地方)のいくつかの町村でいまだにそこなわれている。そこでは町中の服喪者が家の鎧戸を閉ざしておかねばならない。従つてこうした部屋の住人は、明るい昼間にも灯火を灯さなければならない。

(3) フッガーライ長屋 アウクスブルクにヤーコブ・フッガーが建てたもの。百六の家から成る。貧民の収容・扶養にあてられてゐる。あるいはかつてそうだった。(訳者補足→まさに機能している。年間の家賃は二マルクとか。ただし、この物語の主人公マティルデがアウクスブルクの町にやつて来たとき、すでにこれが創立されていたかどうか。もっとも、昔話のアナクロニズムの指摘は野暮の骨頂だらうから、これで止めておく)。

(4) 目 編み物の編み目

注

(1) デュンケルスピュール ディンケルスピュール。言わずと知れた当今名高いドイツの観光地で、いわゆるロマンティック街道沿いの中世の色濃い小さい町。後出の「アウクスブルク」と同様、ムゼークスの綴字は現代のそれとは異なることがある。

(2) シュヴァーベンの同盟都市 Schwäbische Bundstädte シュヴァーベン(ドイツ南西部地方)の二十二の神聖ローマ帝国直轄都市は、一一三一年相互援助のため同盟(シュヴァーベン都市同盟 Schwäbischer Städtebund)を結んだが、一三八九年には事実上終焉を迎えていた。この物語の背景は十五世紀末葉と思われる所以、都市同盟所屬都市とするには難がある。しかし、シュヴァーベンの帝国直轄都市を指していると思われる。

なお後出の、その総会がヴァッカーマンの城攻めを決議する「シュヴァーベン同盟」(Schwäbischer Bund)は、一四八六年皇帝フリードリヒ三世から提案された「国内平和」(Landfrieden)を擁護するため、一四八八年エスリンゲンに創設されたショヴァーベンの帝国直轄都市、騎士、諸侯の同盟。歩兵一万二千、騎兵一千二百、および、同盟裁判所を所有。とりわけ強盗騎士の征討に立ち向かった。強盗騎士は、堅固な山城に拠つて、あらくれ男どもを率い、ここから出撃して、車馬の通う街道筋や舟運可能な河川での通商を妨げ、高額の関税を課したり、貨物を略奪したり、旅人のうち富裕な者がいるとみれば、これをとらえて身代金を家族に請求したりする、ヴァッカーマンのような貴族たちのことである。ドイツ農民戦争でもその軍事力の優越が証明された。一五二五年の農民反乱の敗北後一五三四年に解散。

(3) 博愛主義者の腕折り R ch……やらかしたのと同様な 博愛主義的教育学の創始者ヨハン・ベルンハルト、バーゼドウ (一七二三一一一七九〇) が設立したデッサウ博愛主義協会の一人ライヒ修士と、闘争好きのバーゼドウとのあいだのかなり長期に渡る確執のあと、一七八二年末

とうとう摑み合いの喧嘩が起こった。これについては双方に肩入れする連中が、それぞれの出版物で報道している。それによれば事実は逆で、バーゼドウがライヒ修士を殴って片目の周りに青痣を作った。一方後者は、バーゼドウの右腕を折つてしまつてやれたならぬ、と考えたに過ぎないようだ。

(4) リュディアのアラクネー オヴィディウスの「転身譚」によれば、大体こんな物語である。小アジアの西岸、コロボーンの町にアラクネーといふ機織りに優れた少女が住んでいた。アテーナーの女神は紡績のわざをつかさどる御神であるが、アラクネーは女神をないがしろにする暴言を吐いた。アテーナーは老婆に身をやつし、ある日少女の傲慢をたしなめにでかけた。しかしアラクネーは技比べで女神にだつて勝つてみせる、と大言壯語するしまつ。正体を現した女神と、蒼白になりつつも謝ろうとしない少女は、機織り合戦を始める。ついに女神はアラクネーの織りだす文様に立腹。その布を断ち切り、その頭をたたく。少女はくびれて死のうとするが、女神は命だけは助けてやる。その代わり、アラクネーは蜘蛛に変身させられ、いまだに昔のわざの憐れな真似を繰り返している。

(5) ニクセ Nixe ドイツでの水の精は普通こういう。美しく、優しく、人間に害をあたえない、のが属性。ただし男の水の精 (Nix, Wassermann) はこれとは正反対で、醜く、残酷で、人間の女性をさらつて妻としたり、それとの間に生まれた赤子を喰つたりする。

(6) 水の精 ニンフをこう訳した。ギリシャ神話に出てくる海や河川、森などに住む女の精たちの総称。

(7) 方伯夫人聖エリザベト チューリンゲンの方伯夫人 (一二〇七一一三二) は在世中からその厳しい懲悔の業と、とりわけその慈善行為で聖女とされていた。彼女の貧民救済事業については早くから数々の伝説がまつわっている。

(8) アウクスブルク アウクスブルクがこう縁られている。この都市はイタリア、特にヴェネチアとの交易の要衝であり、スペイン、ポルトガルが直接インドに達し、喜望峰経由で東方と通商する大航海時代の開幕にその栄光には影が射し始めるが、その後しばらくは依然富み栄えていた。(9) 対日照 大いにちしきょう、とも読む。天文学用語としては、太陽と正反対の夜空に見える微光現象。ここでは民間信仰での、幸せな星回り

の対極にある不幸な星回りのことらしい。

(10) 見せかけ料理の鍋の蓋 ある知りたがり屋の女についての民間伝承の笑い話をほのめかしたもの。この女性は鍋の蓋を取つたら刑罰に処する、と禁じられたのだが、好奇心を抑えきれなくなり、蓋を開けると、中から小鼠が飛び出してしまう。

(11) ロレットの聖処女 カサ・サンタ（聖なる家）、すなわち、伝説によれば一二九一年天使たちによってイタリアのレ・マルケ地方のロレットに運ばれたナザレのマリアの生家のなかでは、古い（今日では火災により消失）マリアの像が信徒たちに崇められ、カトリックの習俗に従い、衣装や装飾品で豪奢に飾りたてられていた。

(12) ヴェールの裾は水に浸つたかのようにしつとりと濡れていた ドイツ語圏の伝説によれば、水の精は、男でも女でもしばしば人間の姿で陸に上がるが、その際がならず服の裾が濡れていることになっている。

(13) あんよはお上手を習う紐 Gangelband 幼児がこれにすがつて歩行の練習をする紐。

(14) 皇帝フリードリヒ 神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ三世（ドイツ国王フリードリヒ五世）（一四一五—一四九三）

(15) まつしろ白鳥 Vogelkreideweib 民間信仰で、悲痛な声でなきわめいて人の死を告知する存在のひとつ。ハルツの有名な哭きおつかあやスコットランドの泣き女（バンシー）のたぐい。

(16) 典雅の女神 グラティアエ。ギリシア神話のカリテスの三姉妹（アグライア（輝き）、エウプロシュネ（喜悦）、タリア（榮え））にある。

(17) ヤーコブ・フッガー アウクスブルクを拠点に十五・十六世紀膨大な財力を誇った南ドイツの商家大フッガー一家の当主。フッガー家は、イタリアを中心とする東方貿易、銀鉱山経営、教皇、皇帝への金融によって富み栄えた。ヤーコブ一世（一五二五年没）なら物語の時代と合うが、名高いのはヤーコブ二世（一五六〇年没）。彼はボルトガル王室と手を組んで、東インドへアウクスブルク商船隊を派遣、教皇庁の免罪符販売にも巨額の資金を提供。フッゲライの創立者（一五一九年）である。

(18) 喇叭銃 銃口がらつぱ型に開いている銃。口径に構わず、散弾、釘、金属の折れなどなんでも詰めこめる。これにぼろ布で詰めをし、いざというとき発射すれば、近距離では大きな被害をあたえる。

(19) シュヴァーベン農民戦争 通常農民戦争と呼ばれるが、正しくない。下層の民衆の社会運動。最後の蜂起は一五二五年。十五世紀にすでに、また十六世紀初頭に農民層と都市の無產階級の一揆が無数に発生していた。シュヴァーベンの「農民戦争」は最初各地で優勢だったが、暴行略奪の激化により、信奉するルターの支持を失うなどして、諸侯、騎士、都市市民層の組織だった軍事に破敗されてしまう。

(20) パトムス エーネ海に浮かぶギリシャの島。福音史家の一人ヨハネが、亡命生活のあいだここに滞在、「ヨハネ默示録」を書いた、という。

(21) 十字軍のドイツ人騎士 ein deutscher Kreuzherr Krenziherr をより正確に訳せば、十字軍時代に成立したいくつかのアウグスティヌス派の宗

- 規を持つ騎士修道会の参事会員。トルコ軍により、パレスティナから排撃されてから、十字軍の騎士修道会士は、(さらに)ロードス島からの撤退後)長年マルタ島を固守した聖ヨハネ騎士団(マルタ騎士団)の他、東ヨーロッパの異教徒の征討に当たつたものがいくつかある。ドイツ騎士団は有名。
- (22) 蔵代官 Kastenvogt 穀物倉庫の管理官。一般に莊園や城の管理官でもある。
- (23) 驚靈 Poltergeist 特定の家に出没する姿を見せない精靈で、家具類、食器類を投げたり、家鳴り震動させたり、極めて騒がしい。乱暴なことが多く、これに憎まれる家人は怪我をさせられることがある。ロンドンの雄鶏小路のそれは有名。日本にも同種の現象の記事が江戸隨筆に残されている。
- (24) ループレヒト Ruprecht 一般には Knecht Ruprecht クリスマス前に良い子に贈り物をして回る幼子イエス、あるいはサンタクロースの従者(Knecht=クネヒト)として、悪い子を罰す役回りの怖い存在。日本の秋田地方の「なまはげ」を想起させる。
- (25) 謝肉祭 Karneval は南ドイツでは Fastnacht, Fasnacht, Fasching などと呼ばれる。
- (26) 白い雄牛の背に乗つてベラグスの急流を泳ぎ渡る 未詳。白い雄牛云々は、それに変身して美女エウロペーを誘拐してボスフォルス海峡を泳ぎ渡つたゼウスの話を思い出させるが、これは女人の烈しい恋の例には不適当である。
- (27) 皇子マックス のちの神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世(一四五九—一五二九)。マティルデの乙女時代の末をその生誕と重ね合わせるのは無理なようだ。
- (28) 十字軍士だからで 十字軍士は神のために武器を執つて異教徒と戦うことを誓つた修道僧。従つて妻帯はできない。たとえば、十七・十八世紀のフランス王國海軍士官には、(注21)で言及したようなマルタ騎士が多くいたが、彼らは終生独身に終わつた。後の本文でも関係の説明あり。
- (29) 西風 オランダ、航海に頼るギリシャ人に最も恐れられていたのは荒々しい北風。その反対に優しいのが西風。春の季節の微風である。
- (30) 運命の女神 ローマ神話のバルカラ。ギリシャ神話のモイライの三老女神(クロートー(紡ぐ者)、ラケンス(預けあたえる者)、アトロボス(曲げえない者))にあたる。
- (31) 九種類の薬草の入つたスープ 民間信仰によれば、九種類の緑の香味野菜で作ったスープは、熱を下げたり、病気を治したりする効能がある、とのこと。今日でもヘッセン地方では聖木曜日(復活祭前の木曜日)に九種類の香味野菜でできた緑ソースをこしらえる、そうな。
- (32) 終油の秘蹟 終油礼。カトリック教の儀式のひとつ。臨終の際信徒の心身に慰安をあたえるため、司祭が聖別した香油を額などに塗る。
- (33) 四終 カトリック教の教義における四つの大事(死、審判、天国、地獄)。
- (34) ヒポクラテス顛貌 死相。瀕死の者の顔に現れる死の兆候を始めて描寫したギリシャの医師ヒポクラテスに因んで、こう名付けられる。
- (35) 十八時を指した 未詳。どなたかご高教を。

(36) バフォス キュブロス島南岸の町の名。同島は愛と美的女神アフロディーテーの聖なる島なので、各地にそれを祀る社があるが、とりわけここには大神殿が設けられていた。

(37) 働き者のマルタ 新約聖書ルカ伝十章三十八節。イエスを家に招き入れたマルタはもてなしに忙しく働き、イエスの足元に座つてその話を聞き入り、何も手伝おうとしない姉妹マリアを不満とした。しかし、イエスをマリアをより良しとした。

(38) 寡婦相続分 Wittum 中世の法律用語。寡婦が受けける亡夫の財産の相続分。

(39) 人狼 Werwolf ドイツ語闇伝説に頻繁に登場する存在のひとつ。本来は人間だが、折々なにかが機縁で狼に変身してしまう。そのあいだは獸としてゐるまわざるをえない。「サガ」にもすでにこのモティーフの話がある。

(40) 浴室をしたたかに熱くさせし 蒸し風呂である。シュヴァーベン有数の帝国直轄都市ウルムには、この物語の背景とおぼしきころの一四八九年一六八の浴場があり、浴場経営者は蒸し風呂を提供していた。蒸し風呂は十二世紀にはすでに一般的だった、という。

(41) 水の精 Naias はギリシャ神話の川の水の精。

(42) 洗礼肌着 Westerhendlein 祈禱のあいだ洗礼を受ける子どものうえにひろげられる白い肌着。洗礼により子どもにあたえられる清らかさの徵。

(43) 天使袖の服 Engelkleid エンジェル・シリーヴの少女服（長い袖が垂れている十八世紀の女児服）。男の子だが、まだ小さいので、作者はこうしたみなりを考え、ブリーチェズを履かせていないわけ。

（一九九九年六月十一日 受理）